道南ユースマガジン each［イーチ］ No.05
2025.9.28発行
発行/函館コミュニティプラザGスクエア 〒040-0011 北海道函館市本町24番1号 シエスタハコダテ4階
TAKE FREE

SHARE ⋀ STAR

シエスタ ハコダテ

〒040-0011 函館市本町24-1 TEL/0138-31-7011
www.sharestar.jp

営業時間 1F~3F 10:00~20:00
（スターバックスコーヒー 7：00～22：00）
4F Gスクエア 9:30~21:30

#シエスタをシェアしよう

シエスタハコダテ公式SNS

自分らしさって何だろう?
きっと誰にだって一言では表現しきれない複雑な想いがある。
自分とは何なのか探求しよう。

私とこれを読んでくれているあなたには、たくさんの違いがある。
産まれた場所や、育った環境。お気に入りのおやつや、新しく挑戦したいと思ってること。
秘密にしてることや、忘れたいと思うほどに悲しかったこと。
私はこういう違い全部ひっくるめて「自分」だと思うし、「あなた」だと思う。

私たちは生きている中でたくさんの体験をする。
時には自分とは何かがわからなくなり、みんなに合わせて何となくで日々をやり過ごすこともあるかもしれない。
自分らしさを保ちながら人間関係を作ることはすごく難しいことだから。

だけど絶対に自分らしさを諦めないでほしいと思う。
たくさん考えて、いろいろな角度から見てみたりして、
その結果、そこで見つけたものが100%完璧には自分自身を表現できなかったとしても、
それはあなた自身を形作る一部にきっとなるはずだ。

自分にしかない表現は、きっと出汁の効いたおでんみたいにとてもいい味になる。
だからたくさん考えて、真っ直ぐいかないことは曲がってみたりして自分自身の探求者になろう!
ちょっと大袈裟かもしれないけど、それが生きるための軸になることもあるのではないだろうか。
私はそう思う。

What's each?

LOCAL MAGAZINE "EACH"

ローカルマガジンプロジェクトについて

「ローカルマガジン制作を通して、道南の若者が地域や人と関わり、
それぞれの"個"をみんなでカタチにする過程で、様々な成功や失敗を乗り越え成長していく」
そんな場と機会をつくりたいという想いから始まったプロジェクトの第5弾！
道南で暮らし、関わりを持つ若者が集まった約4カ月間。
私たちの現在地の5号目の完成です。

「each」に込められた思い

「若者一人一人の"今"を全力で肯定したい」
存在も、思想も、感情も、価値観も、全部ひっくるめた"今"その時の個を、
「それでいいんだよ」と言ってあげられるような、
eachという媒体を通してそんな許容のある場をつくりたい。
その上で、それぞれがこれからの一歩を踏み出せる機会をつくりたい。

今回のプロジェクトで、そのすべてが出来たわけではないし、
まだまだ道半ば、むしろ発行してからが「each」のスタートラインです。

「それでいいんだよ」と言ってくれる、
家でも学校でもない、親でも先生でもない、ちょっとナナメの場があれば、
地域の若者たちが失敗を恐れず、勇気を出して、新しい世界と出会える機会があれば、
道南の未来はもっともっと楽しくなる。
そういう希望を抱いて、これからの「each」を歩んでもらえたら
こんなに嬉しいことはありません。
このマガジンを読んだ人にもそんな思いがどうか伝わりますように。

函館コミュニティプラザGスクエア

each No.05

contents

06 eachの軌跡（キセキ）

07 「Hakodate to the future」
観光・食・イベントの3つの切り口で函館の未来を考える

15 「Baking,and Beyond　おかしづくりを超えて」
こだわりの詰まったロールケーキ専門店を訪ねて

23 「君たちは」
LGBTQをテーマに幸せのかたちを模索する小説作品

31 「Open my Port」
冬の函館での不思議な出会いを描くファンタジー小説

39 「まちのスキマ、増えてます。」
函館の空き家・空き地問題に取り組む学生団体へのインタビュー

43 「みちどこどっこいしょ！」
中高生の居場所づくり「みちどこ」メンバーへのインタビュー

47 学生団体 あくせる。

49 STREET PHOTOGRAPHY by each

48 バックアッパー座談会

51 Editers note

道南の若者がつなぐ、

モノガタリ。

hakodate to the future

テーマ説明

< Hakodate to the future >

『函館の未来へ』というテーマで
函館の現状の学びから
未来へのアクションを考え、
「観光」「食」「イベント」
の3つからアプローチ！！

平野 月琴

誕生日　8月14日

趣味　ゲーム

“イベント”

コスプレが地域資源に
なればいいなぁー^_^

Hakodate to the future

函館の未来

川瀬 真心

函館が珍味でいっぱいに
なれば嬉しいです♡

誕生日　7月22日

趣味　ギター

“食”

堀越 諒

誕生日　2月14日

趣味　韓国語

“観光”

キンパが大好きです
韓国行ってみるのおすすめ

each の軌跡

道南の若者が動く、4ヶ月間のプロジェクト。
目標設定・取材・レイアウト考案、中間発表など
様々な過程を経て「イマ」があります。
自分たちの未来をイメージしながら、1つ1つ丁寧に紡いできました。
each No.5の軌跡(キセキ)です。

Stage.1 観光

愛すべき国・韓国を知らなきゃもったいない!

興味のきっかけ

私が韓国との交流に興味を持ったきっかけは、中学生時代に遡る。当時韓国の大衆文化に興味を持ち始めていたものの、ニュースでは「戦後最悪の日韓関係」や「ノージャパン運動」なるものが度々報道されていた。歴史問題があるとはいえ、なぜこんなに近い隣国なのに対立が激しいのかということに疑問を持った。その時から私は韓国の政治や社会、伝統文化にまで興味が波及し、韓国語を勉強してより多くの人と交流をしてみたいと思った。

近くて遠い国、韓国

「近くて遠い国、日本」あなたはこの言葉を知っているか。これには物理的に近いにもかかわらず、歴史のために近づきにくい韓国と日本の関係が含蓄的に含まれている、韓国のフレーズである。今から六年程前、日韓関係は戦後最悪と言われていた。両国文化交流が盛んな一方、過去の歴史による対立が感情の悪化を招いている現状を目の当たりにした。私は、観光を活用し日本と韓国の相互理解を深め、**韓国を近くて近い国にできないかと思案を巡らせた。**

函館と韓国の架け橋 申東煥さん

函館から日韓の架け橋を構築すべく、函館に住んで二十七年目、飲食業や旅行業を営む高陽市(コヤン市、函館市の姉妹都市)出身の**申東煥**(シン・ドンファン)さんに話を伺った。

ホームステイを機に函館を訪れた申さんは現在、観光資料、ハザードマップの翻訳などを担当し、函館と韓国の交流の最前線を担っているほか、梁川町でアットホームな韓国居酒屋「ヒンナ」を経営している。

市民向けの事業などんなことを?

毎年夏に行われるはこだて国際科学祭では、子供向け科学雑誌の海外キャンプとして訪問した韓国の小学生と函館の小学生の交流イベントを行っている。

また、函館市民向けの通訳案内も行っており、ソウルや釜山、慶州(キョンジュ)などを巡るツアーも行った。

その他にも、月に一度谷地頭で韓国文化講座も行っており、函館市民に韓国をより知ってもらうための事業を数多く行っている。

このような事業を通じて函館の学生に韓国のことを知ってもらうことで韓国留学に行った人がいることを、申さんはやりがいに感じていると言う。

韓国おすすめ観光地

韓国南西部の都市、全州(ジョンジュ)がとてもおすすめ。ビビンパの発祥地であり、昔の古い街並みも残っている。全州は特に料理がおいしく、ゆったりできる町である。

キムチ作りや韓国の文化も体験できる。

申さん、今後こんなことを始めたい!

韓国から函館に受け入れる事業は行っているが、函館とソウルを結ぶ国際定期便の運航も始まったので、函館から韓国に行く機会も作りたい。

ただ個人で旅行するのも良いが、高校の修学旅行などプログラムを通して地元の人と交流することでより深く韓国のことを知ってほしい、と申さんは言う。

また、申さん自身のお店で韓国語学習者向けにセミナーを開催したり、通訳アルバイトなどを通して人材育成を行い韓国語を勉強している人たちがただの趣味で終わらないよう雇用創出にも貢献していきたい。

今後はさらに従業員を増やしたり韓国に支社を作るなどして事業の拡大を図りたい。

私からみなさんへ

まだ海外へいったことがないという方に是非知ってほしい韓国、そして海外の魅力。それは、海外に実際に行くことでしか得られない刺激や面白さがあるということだ。

町の匂いも飛び交う言葉も料理も全て違う。当たり前のことだが、それらに直接触れてみれば、自分の中の「当たり前」がほどかれるのが分かるはずだ。

海外の空港に降り立った時、見慣れない外国の航空会社の尾翼が軒を連ねる。あなたの海外での非日常な経験の始まりを告げる景色だ。

町を歩きながら、気になるお店があったら入ってみたらいい。道に迷ったら近くの人に聞いてみたらいい。とにかく五感で地元に触れてほしい。

海外と聞いて治安や言語が心配だったらまずは韓国。素敵な経験になること間違いなし。

申さんからメッセージ!

日本と韓国はまだお互いに国民の間に完全な理解を築けていないのが実情である。まずは実際に韓国へ行ってみな。テレビやネットで情報を得るよりもまずは実際に韓国の文化や生活に触れて、それで良いかどうか判断したらいい。実際に見てみて自分のイメージ通りかもしれないし、もしかしたら違うかもしれない。

Stage.2 食

海をまるごと、いただきます!

専務取締役の青山竜市さん(左)と主任の青山イサムさん(右)。

珍味が好きな私

小さい頃から珍味の食感と風味が好きだ。そんな中、ここ数年、函館でのイカの不漁のニュースを耳にする機会がとても増えた。どうやら、函館のイカの漁獲量が過去最低を更新しているらしく、海水温の上昇や乱獲、資源の減少など理由は複雑で、漁師や加工業者は厳しい局面を迎えているそうだ。いつも当たり前のように食べていたあの味が、私の知らないところで大きな変化の中にいるのかもしれない。そう思うと、作り手の現状や工夫に強い興味が湧いてきた。

海の恵み、まるごとイカす

私は、一印青山水産株式会社に取材した。一印青山水産は、北斗市で代々イカの加工を行い、すべてのイカの珍味のもとになる"だるまいか"という半原料の卸しをする会社として一次加工を一手に担ってきた。

本家は80年以上水産会社を代々受け継いでいて、祖父が北斗市で分家として独立し、一印青山水産を始めた。このように、国内で一次加工からさきいかまで作れる会社はほとんど存在せず、また、そのような知識と技術、加工の設備を備えている会社もない。

当初は、小さな工場だったが、大きな取引が始まったことやイカの漁獲が好調な時期を経て、大きな工場へと成長した。

現在では近海で多く獲れるニシンを身欠きにしんとして商品化したり、数の子の商品を開発したりしている。

こだわりを届けたい

一印青山水産は2023年8月に通販サイトを開設した。

「一次加工を担ってきた会社としては商品を直接消費者に届けることは今までなかったとのことだった。しかし、珍味を一貫生産できるようになったことで通販サイトを設け、問屋や小売店を介さないことで**自分たちの売りたいものやこだわりのあるものを届けること**ができ、楽しいと言う。また、通販では美味しいもの、珍しいものを売っていき、素材は少し変わっていても伝統的な加工を有効活用していきたい」と前向きに語る。

自然に囲まれて…

「釣りやサーフィン、スキー、スノーボード、キャンプ、狩猟もでき、車で行動できる範囲が広いためレジャーがなんでもできる。また、多くの自然や朝日や夕日が近くにあって、フォトジェニックな景色が身近にあるのは当たり前なことではない」と語った。

遅れる暮らし、止まる未来

「医療や教育、仕事面でも様々な情報が遅れている。未だにFAXでやりとりしたり、パソコンにカメラがついていないためオンラインで会議するにも課題がある」と語った。

若い世代へ向けて

竜市さんは、「生きていくことは大変だということを伝えたい。イカが獲れなくなってきて会社が潰れるのではないかという大変な思いをしてきて、なんとか頑張って今がある。若いうちは他人の評価ばかり気にしているから、自分の不都合なところに目を向けられていない。自分も水産業をやりたいと元々思っていないけど、繋がりもっと思う気持ちが自分が実現したいことも増えていき、楽しくなっていく。」

一方でイサムさんは、「頑張りすぎないように、立派になろうとしなくていい。他人をうらやましいと思うこともあるけど、そういうものに縛られないで無理に自分を良く見せなくてもいい。」と語った。

祖父の挑戦から新たな飛躍を!

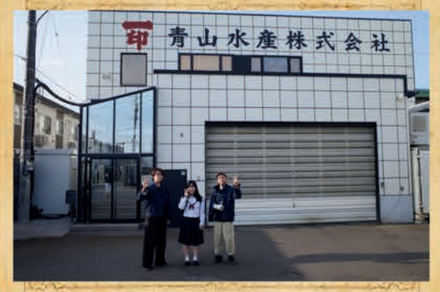
「創業者である祖父が挑戦して作り上げた一印青山水産を守り、自分や会社を守ることを第一に、**持てる力を地域のために**活かして協力していきたい。また、**水産だけにとどまらず**水産資源に頼らない食品加工会社になっていきたい」と意気揚々に語った。

この話を受けて、祖父の作り上げた地盤が未踏への歩みを支え、残したものに囚われず勇気を持って挑戦することへ繋がっているのだと感じた。

工夫の裏にある強さを感じて…

一印青山水産は消費者に良いものを届けるという強い思いで、辛い時期を乗り越えながら、会社、そして水産業を守ってきたのだと感じ、スーパーに並んでいる珍味に生産者の大きな想いを感じられるようになった。

そして、水産業にとらわれずに挑戦し続ける心構えに感銘を受けたと同時に、水産業に希望の光が灯ったように感じた。



取材を通して考えた展望

取材をして、一印青山水産がこれまで培ってきた水産加工の技術や設備を基盤にした、新しい挑戦をするときにどんな形であれ携わりたいと強く思った。そして、地域や水産業、様々な分野で大きな転換を起こす一員として一印青山水産が活躍できることを願っている。私は、函館が大好きだ。ずっと函館に住みたいと思っている。だからこそ、函館の様々な分野で挑戦する人の役に立ちたいし、自分もアクションを起こし続けられるような人間になりたいと決意した。

Stage.3 イベント

函館の景観を活かし、もっと幸せを!!

「愛が、思いが、形を成す」

「コスプレ」皆さんは、この言葉を聞いて何を思うか。愛情を形にできる最高の趣味だと思う人もいれば、オタクが行うことだと揶揄する人もいるだろう。様々な思いや、考えが行き交うコスプレを、私は愛している。なぜなら、私はコスプレから好きを表現することの美しさを学んだからだ。自分の好きというのは、人に隠しがちだ。絶対に周りから認められるという自信がない趣味についてなら尚更。私は、コスプレに触れるまでは、自分がアニ×オタクであることを隠してきた。相手が好きだと言ったら、自分も好きだという。その程度だった。これは、アニ×を否定しているのではなく、自分が好きなことが相手が嫌いなことだったら怖いからだ。そんな怖さを、打ち消してくれるくらい、コスプレをしている人達は輝いていた。ずっと、ずっと、楽しそうだった。私は、コスプレをして自分を曝け出せるようになった人、自分に自信がついた人、友達ができた人、キャラへの愛が深まった人。そういった宝石みたいに輝いている人々をもっと増やしたくて、勇気を与えたくて、取材を行った。

夢と希望の制作者 穂高さん

「沼ハロ」「五コス」といった、函館の有名なコスプレイベントを沢山開催してくださっている。

このような大きなイベントを通して、コスプレイヤーさん同士が関わったりする機会が増えるのだそう。私がコスプレに興味を抱いたきっかけも「五コス」だった。

このようなことからも、コスプレイベントというのは函館市民だけが楽しむイベントではなくなってきていることが分かる。私は、学校の活動で宮船ボランティアをしているが、コスプレイベントについて聞かれたことは、今まで三回程ある。日本だけでなく、世界に函館のコスプレが注目されていると言ってもいいだろう。

感じるやりがいとは

何年か、コスプレイベントの設営を続けていくなかで、森町のさくらまつりが七十周年を記念して、コスプレイベントの声がけが入り、そのあたりから、江差などといった地域からも声がかかり、コスプレを通し地域の魅力に気づいてもらえるような機会が増え、コスプレ自体が地域資源として捉えられ始めていることがやりがいだそう。

7月13日に行われた函コス ↓

函館の魅力とは

函館は飛行機、フェリー、新幹線といった交通網が揃い、街の中心地からのアクセスも非常に良い点が他地域とは異なる大きな強みである。

また、観光資源にも恵まれており、「何もない」と言われがちな中でも、自分自身が面白いと思えることを創り出す姿勢が大切だそう。

函館にはそのための素材が揃っており、自らの工夫次第で新しい価値や楽しさを生み出せる可能性に満ちた街だという。

景観を活かし、函館のために

函館は美しい景観で溢れているのに、うまく利用しきれていないという印象があるそう。

コスプレイベント会場だけでなく「函館だからこそ出来る」という部分を重点的に考えて、アクションを起こすと良いのではないかとのことだった。

実際に私の友達が、コスプレイベントに参加するために遠征し、函館の良さに気づくことが出来たということもある。

今後の目標

名古屋がコスプレしながら街をすごせるように、街自体がコスプレを産業にしているように、函館でもコスプレが日常になればいいなと。コスプレをしたいから函館に行こうーとなれるような街に、風景にしていきたいそう。

穂高さんからのメッセージ

イベントやコスプレの常識は時代と共に大きく変化している。昔は撮影機材が限られていて、動画撮影は禁止されていたが、今は技術の進化により動画が主役となり、SNSでも広く共有されている。

こうした変化の中で、今の世代が新しいスタンダードをつくり、自分が「憧れる存在」ではなく「憧れられる存在」として、楽しむ側から楽しませる側へ成長していってほしいとおっしゃっていた。

私に今できること

eachを通して、沢山の希望を与えたい。自分でもまだ見つけられていない自分の趣味に出会ってほしい。コスプレはするだけじゃない。見る人にも、関わる人にも勇気をくれえる。そんな。コスプレを私はもっともっと広めて行くために、なにかイベンを等を企画できたらいいなと思った。

Baking, and Beyond

プレミアムロールケーキ専門店
ガトー・ルーレ
北海道 函館市 宮前町 25-8

ネットのレシピで、なんでも作れる

だけど、専門店はどうだろう？

「おかしづくり」を超えて

Baking, and Beyond

RINKA
HARUKI
YUA

これは、「お菓子を作りたい」そんな
甘い考えの高校生が辿り着いた、
人生つまったロールケーキの
ノンフィクション。

each 2025

知ってからでは、風味も変わる。

デザイン・コスプレ担当 平野
自分の好きなこと追求できて、とても楽しかったです!!
趣味を思う存分楽しんでる方々本当にすごいと思います
貴重な経験ありがとうございました!!

観光担当 堀越 諒
日韓交流の関心をただ関心で終わらせず、each
を通して交流拡大の土台を築くことに繋げられ、
大変有意義な経験になりました!
ご協力くださった方々に心から感謝しています!

The end

食担当 川瀬 真心
今回初めてeachに参加して、
ずっと好きな珍味について青山水産に取材できて
とても有意義な経験になりました!

Thank you for reading!!!

Prologue 巻頭言

函館には、珍しいロールケーキ専門店「ガトー・ルーレ」がある。「実はお菓子の商品開発の仕事もしているんです」と話すのは、取材に応じてくれた店主の大久保直樹さん。今回は、甘い香りの漂う工房で、私たち取材班に製造体験までさせてくれた。では、この店の扉が開くまでに、どんな物語があったのだろうか。

Gâteau Roule

ロールケーキの
専門店を
知っていますか

「専門店」の始まりとメニューの変遷

大久保さんには二人の娘さんがいる。十四年前、三女が調理の専門学校を卒業し、調理師免許の資格を取得したことが転機となった。「せっかくなら自分たちのお店を持とう」という話が持ち上がったが、函館にはすでに多くの洋菓子店がある。普通のお菓子を並べるだけでは埋もれてしまうし、数多くの種類を毎日作り続けるのも大きな負担になる。そこで大久保さんは、自身が長年培ってきた商品開発の知識と経験を活かし、店の核となる『他にはないオリジナルロールケーキ』で勝負することを決めた。

開店当初は、プレーン、チョコ、抹茶、マロン、チーズの5種類を、それぞれノーカットの形で販売していた。しっとりと焼き上げたスポンジに、やさしい甘さのクリームをたっぷり包み込んだロールケーキは、たちまち評判を呼んだ。

しかし「いろんな種類を一度に楽しみたい」というお客さんの声が寄せられるようになり、試行錯誤の末、毎月5のつく日限定で定番商品5種類を組み合わせた「ファイブルーレ」を考案。この新しい販売スタイルは大きな反響を呼び、さらに季節限定の商品が増えていく中で、現在一番人気の商品「シックスルーレ」へと進化していった。

オーナーの大久保さんと次女・舞妃さん、三女・聖羅さん。
優しく微笑む姿が、お店の温かい雰囲気を表している。

一番人気のシックスルーレ。カラフルでとっても可愛い。単品で購入するよりもお得なのもポイント！

表紙

季節の
メニュー

column ① かわいいパンフレット

季節ごとのメニューや、ガトー・ルーレの七つのこだわりについてなどが書かれている、綺麗な赤色が目を惹く可愛らしいメニュー。

実は、次女の舞妃さんがデザインしたもの。

お菓子だけでなく、さまざまなところにセンスが光っている。

GÂTEAU ROULE'S

ESSENCE

ガトー・ルーレが
大切にしていること

Essence 1 直接販売へのこだわり

現在、ガトー・ルーレではインターネットを通じた通信販売は一切行わず、**店舗での直接販売**と、全国各地の有名デパートで開催される**物産展での出店**のみで商品を提供している。

通信販売に比べ、直接お客さんとやり取りをする販売方法は、こだわりや美味しさを伝えやすく多くのリピーター獲得に繋がっている。

さらに「物産展で購入した季節の限定商品を食べたい！」と**お店まで直接連絡が来る**こともあり、その声には郵送で対応することも。

Essence 2 家族でつなぐ経営

現在お店は家族で経営しており、次女と三女がメインで製造。直樹さんがそれを補助する形で運営されている。

ガトー・ルーレは**「常に変わらぬ最高水準のおいしさ」**を提供するお店として、多くの人々から愛され続けている。

Essence 3 季節を感じる限定商品

ガトー・ルーレでは四季折々の素材を取り入れた限定商品づくりにも力を入れている。

春には桜餅や苺、夏には白桃やマンゴー、秋には洋梨やかぼちゃ、冬には紅茶やラムレーズンといったように、**季節や年間行事を取り入れた商品**を開発。

これらの商品は、お客様に**「季節の訪れ」**を知らせる存在となっている。

Essence 4 素材選びと製造の工夫

製造面においては、ロールケーキの種類ごとに相性の良い食材を一つ一つ丁寧に選び抜き、値段や産地にとらわれず**「最もおいしいと感じられる素材」**を使うことを徹底している。

例えば、抹茶ルーレに使われている抹茶は有名な宇治抹茶ではなく、風味が濃く上品な口当たりになる福岡産の八女抹茶を使用している。

さらに、製造後は短時間で急速冷凍を行うことで、焼きたてや作りたての**風味・食感をほぼそのまま閉じ込める**ことに成功。

この技術により、遠方への輸送や長期間の保存でも品質を損なわずに提供でき、全国の物産展でも**安定したおいしさ**を届けられるようになった。

column ② 店名に込められた思い

ガトー・ルーレは、30年以上続く お菓子開発の会社 「㈲ヌーヴェルガトー」によるお店である。

店名の「ガトー」は『お菓子』、「ルーレ」には『巻く』という意味が込められた和製仏語が使われている。

また、会社名の「ヌーヴェル」は『新しい』という意味の仏語で、新しいお菓子の開発を象徴する名前となっている。

徹底解剖（てっていかいぼう）

コラム①で触れた、ガトー・ルーレのパンフレットでは「７つのこだわり」が説明されている。よく聞く「こだわり」は３,４つのイメージも強いため、７つというだけでも思いを感じる。

人生を通して積み上げてきた、こだわりの詰まったこのページ、徹底解剖せざるを得ない。

※これまでの記事で紹介しきれなかったこだわりのみ、**厳選して掲載した。**番号に対応して７つを追うこともできるよう、参照はまとめた。

ガトー・ルーレの７つのこだわり

1 オリジナルレシピの新食感
お菓子の商品開発を専門としている当社のオリジナルレシピによる新食感のロールケーキです。
▶参照：巻頭言・column ②

2 鮮度抜群！赤鶏卵と生クリーム
新鮮な赤鶏卵をたっぷり使い、焼成後はあら熱を取り、すぐに風味豊かな各種クリームで巻き上げています。

3 素材と手仕事へのこだわり
厳選した素材をたっぷり生地に練り込み、一緒に巻き上げるフィリングも全て当店で丁寧に作っています。

4 冷凍でも変わらないおいしさ
冷凍タイプでもチルドと変わらず、出来立ての味わいを楽しめ、再冷凍も可能です。

5 日持ち＆持ち運び安心
冷凍タイプは日持ちが長く、長時間の持ち歩きや発送が可能なので、お土産やプレゼントに最適です。

6 目指せ制覇！季節限定フレーバー
豊富なラインナップで毎月季節の限定商品を2〜3種類ずつ入れ替えています。

7 お得に楽しむ詰め合わせ
カットの詰め合わせはお得に様々な味を一度に楽しめ、年間を通しての種類が豊富です。
▶参照：p.2『シックスルーレ』

▼一つずつ手作業で巻いていく

▲生地に加える、きめ細やかで光沢感のあるメレンゲ

2 鮮度抜群！赤鶏卵と生クリーム

ガトー・ルーレのロールケーキを食べてみると、まず感じるのはクリームの上品な口当たりと、口の中にほんのり広がる牛乳感だ。甘さは控えめながらも、ミルクのコクがしっかりと感じられ、最後の一口まで飽きさせない。

ガトー・ルーレで使用される卵は、よく見る白玉ではなく赤玉を使用している。白玉に比べ、焼き上がりの香りや味わいが格段に豊かになる。店主の大久保直樹さんは毎朝店に来たら必ずいちばん初めに卵を割り、**卵黄と卵白を分けて調整する。**卵には平均的な比率があるが、実際には個体差がある。そのズレをしっかりと防ぐことで、生地の膨らみや風味などにばらつきが出なくなるのだ。その卵へのこだわりこそ、ガトー・ルーレの美味しさの秘訣だろう。

3 素材と手仕事へのこだわり

生地にはそれぞれのロールケーキに合わせて具材を練り込むことで、滑らかなクリームとふわふわのスポンジに、程よいアクセントを与えている。例えば渋皮マロンルーレは渋皮マロンのミンチをたっぷりいれて、より『栗感』が伝わる商品となっている。

フィリングにもこだわりが詰まっており、ロールケーキの**生地に使っている材料との味のバランスを考慮**し選んでいる。実際に、ショコラルーレは生地に濃厚なチョコレートを練り込んで焼いており、その生地のおいしさが引き立つようにさっぱりとしたクリームが使われている。他にも、抹茶ルーレはオリジナル抹茶ソースをクリームと一緒に巻き上げており、抹茶の風味が口いっぱいに広がるようにつくられている。クリームは厳選した北海道産を中心に、それぞれの季節の素材と合わせたオリジナルクリームを作ることで、**こだわりとおいしさが両立した**商品開発が実現されている。

4 冷凍でも変わらないおいしさ

一般的な市販のロールケーキは、冷凍保存をするとどうしても食感や味が落ちてしまうものだ。解凍したときに生地がパサついたり、クリームの食感が落ちてしまったりすることは、スイーツ好きなら一度は経験したことがあるだろう。しかし、ガトー・ルーレのロールケーキは、**冷凍しても驚くほど味や食感が変わらない**のだ。むしろ「これは作りたてと同じではないか？」と思わせるほどで、口に入れた瞬間、しっとりとした生地と滑らかなクリームが絶妙に調和する。

なぜそんなことが可能なのか。その理由は、**生地とクリームのバランスに徹底的な研究が重ねられている**からである。冷凍してもクリームの水分が逃げず、解凍後も驚くほどのしっとり感が保たれるようになったのだ。さらに、口どけが作りたて同様に軽やかでまろやか。生地とクリームが一体となって、上品な味わいを最後まで楽しめる。これがガトー・ルーレが市販のロールケーキや他の店とは違うという理由の一つだろう。

試食した人たちの声 user voices

スポンジが滑らか！
クリームがふんだんに
使われていて、
舌触りが優しい。

冷凍していたロールケーキ
とは思えない！！
食感や味が作りたて！
濃厚なのに くどくない。

生地

クリーム

5 日持ち＆持ち運び安心

ガトー・ルーレの、おいしさをそのまま閉じ込められる冷凍タイプは、とても**日持ちが長い。**観光などでの長時間の持ち歩きはもちろん、遠方への発送も可能だ。**遠くに住んでいる友人へのプレゼント**としてもぴったりである。

冷凍タイプで購入したロールケーキは、家庭の冷凍庫でおいしく保存できる。食べたいときは冷蔵庫に移動させて、その日中に召し上がろう。

味がとっても濃厚で満足度が高いため、自分へのご褒美として「シックスルーレ」をあらかじめストックしておくのもオススメである。

column

③ コラボケーキのデザイン

ガトー・ルーレは以前、アニメ「ツキウタ。」とコラボし、アニメ内の12人のキャラクターをイメージしたオリジナルケーキを開発、販売したことがある。

個々のキャラクターの色合いや雰囲気までもが反映されており、デザインを担当した大久保さんの娘さん達が培ってきた技術やこだわりを感じる。

6 目指せ制覇！季節限定フレーバー

ガトー・ルーレのロールケーキは、味だけでなく見た目でも楽しませてくれる。生地とクリーム、フィリングのバランスを細部まで意識し、そのロールケーキにふさわしいデザインに仕上げるのが特徴だ。特に季節限定のロールケーキでは、**見た瞬間に旬の素材や季節感が伝わるような工夫**があり、シンプルでありながら洗練された見た目をしている。視覚で感じた印象がそのまま味わいへとつながり、満足感を与えてくれる。

前述の「シックスルーレ」は、実は基本の定番5種＋季節のロールケーキ1種、という構成になっている。春はいちごやブルーベリー、夏はマンゴーや白桃、秋はかぼちゃ、冬は紅茶を使ったロールケーキなど、**旬の素材を取り入れた様々なラインナップ**が店頭に並ぶ。訪れるたびに新しい味に出会えるので、何度でも足を運びたくなる。ここではすべてを紹介しきれないので、ぜひ実際に味わって確かめてほしいと思う。

次回予告

ここまでの記事で、ガトー・ルーレのオーナーである大久保さんの思いを追体験していただけただろう。これを踏まえて巻頭言の内容を見返してもらいたい。私たちは、そのガトー・ルーレの大切な工場で**「ロールケーキ作り」をさせていただけた**のだ。この上ない貴重な体験だ。実際に作ったロールケーキのイラストと、私たちの体験談と感想を次のページに掲載した。これらも併せて見ていただきたい。

ただ私たちが伝えたいのは、商品の思いや背景を**知るのと知らないとでは、見え方や風味まで変わってくる**ということだ。

ORIGINAL ROLL CAKE

RINKA

ガトー・ルーレさんこだわりの福岡県産八女抹茶と二種類の栗をふんだんに使った和風ロールケーキ。フィリングには北海道産の生クリームと北海道産紅はるかのさつまいもペーストを使用して、滑らかな口当たりにしました！甘すぎず苦すぎず、抹茶の風味と大きくてホクホクな栗がちょうど良くて、気づいたらロールケーキを食べる手が止まらない・・・そんなロールケーキが完成しました！

デザイン案を作成する中で、私の好きな色の「鶯色」（深緑色）を取り入れたいと思っていました。また元はリンゴのコンポートと粉砂糖を使い、雪の積もった函館山に似せようと思っていたのですが、今が美味しい季節の果物やより抹茶と相性の良い材料などを大久保さんからアドバイスしていただき、美味しさを最大限引き出せるこのロールケーキになりました。

「ロールケーキを作ろう」となったのは、メンバー全員の共通点が料理作りが好きなことから始まりました。案として他にも色々なお菓子も検討しましたが、皆の個性を表現できて、作りたいと思えるもの、それがロールケーキでした。そうして、ロールケーキに関する情報を集めていく中でガトー・ルーレさんを知りました。国内でも珍しいロールケーキ専門店、このお店ならロールケーキを作るコツや工夫を知ることが出来るかもしれない！そんな思いで向かった私たちでしたが、そこで知ったのは、ガトー・ルーレを立ち上げるまでの努力や経験、そしてロールケーキに対する熱意でした。

私たちはそこで本当のプロ意識というものを学び、「ロールケーキを作りたい」から「ガトー・ルーレさんの素晴らしさ、ロールケーキの魅力を伝えたい」と思うようになりました。

HARUKI

私は元々お菓子作りが好きで予定が無い日は簡単なタルトや、生チョコなんかを作って過ごしています。

そんな中で今回、ガトー・ルーレさんで普段できないような経験、家で作るには少し敷居が高い…と思っていたロールケーキ作りを体験させていただきました。私はお菓子の中でも特にチョコレートが大好きなので、チョコレートをたっぷり使い、上にいちごを乗せた甘酸っぱいロールケーキにしたいと思い、デザインを考えました。

作らせて頂いている途中にクリームに混ぜるチョコレートを特別に味見をさせていただいたのですが市販で売られているものより、かなり味が濃く濃厚で驚きが隠せませんでした。

そしてプロって凄い、と感じた事がロールケーキを巻くのも、クリームを絞るのも速く、綺麗でやっぱり違うと感じました。出来上がったものは、私がデザインしていたものからさらにミントやブルーベリーを乗せた色鮮やかで綺麗なものになりました。

今回、eachという企画を通して、ロールケーキを作りたいというところからガトー・ルーレさんを知ることが出来ました。今まで旅行に行く機会があればその土地の菓子店に行っていたのですが、ロールケーキ専門店というのは初めて聞いて驚きました。初めての取材の時に有難いことにケーキを1つ（ショコラ）いただいたのですが、コンビニなどで売られているものとは違い、生クリームはクリーミーで後味はしっかりチョコレートの香りがしてはっきりと違いを感じ、ガトー・ルーレさんのロールケーキを知ってもらいたいと思いました。

是非一度、専門店のロールケーキを味わって、みて欲しいです。

YUA

私には夢があった、「東京の可愛いカフェに並ぶ、まるで作品のようなお菓子をデザインする人になること」。

今回のeachの活動で、その夢が叶ったと言っても過言ではない。なぜなら、お菓子をデザインし、プロの方から直接アドバイスをいただき、そのうえでなんと、ガトー・ルーレの大久保さんの人生が詰まった工夫や材料を使い、「普段のキッチン」で一緒にお菓子づくりをさせていただけたからだ。

取材でお店を訪れたとき、看板メニューの「6ルーレ」（6種のロールケーキが一切れずつ入った豪華なセット）をご馳走になった。その中のひとつ、ブルーベリールーレの豊かな味わいに心を奪われた私は、ブルーベリーを主役に据えたスイーツをデザインすることに決めた。

原宿のような〝夢かわスイーツ〟という叶えたかった野望も、ラメシュガーを中にも外にも散らして、サクサク食感をプラスすることで実現することができた。

今回の活動を通して、「結果」として目にするものの背後には、それを生み出す人の思いや時間、そして人生という〝過程〟がぎっしり詰まっているそんな当たり前のことを、改めて実感した。感謝の気持ちは尽きない。

せめてもの恩返しとして、私はこれからも6ルーレを買いに行くつもりだ。もしこの小さな記事を読んでくださった方がいたなら、ぜひ一度は、ガトー・ルーレの人生を味わってほしい。個人的なおすすめは、牛乳ルーレである。

LGBTQ+を題材にした短編作品

君たちは

当たり前とはなにか。普通とはなにか。
考えたら考えるだけ、ムズカシイ。

あらすじ

『幸せについて考える』という国語の課題が出された工藤澪（くどうれい）。課題に向き合っていくにつれ、自分にとっては重く苦しいアイデンティティを、友達が軽々しく語る姿に複雑な気持ちが芽生え始める。けれど、様々な価値観を持つ人々との出会いを通して、やがて**"言える自分"**へと変わっていく。

Epilogue

編集後記

RINKA
@ maccha_chestnut_

私は今回のEACHの企画にあくまで趣味の範囲、スイーツ作りを深めてみたいというような思いで参加しました。しかし、取材をして実際に記事作りをしていく中で、何かを相手に伝えるために文章を作ることの難しさを知りました。特に写真を配置したり、字体や文字に色を変えるなどのデザインの作業は未だ苦手で、一緒に作業できる二人がいてくれて心強かったです。

取材や情報集めも一度失敗した経験があり、苦手意識があったのですが、今回の活動を通して楽しいと思えました。雑誌作りに関わるスタッフさん、ガトー・ルーレの方々、メンバーの二人有難うございました！

HARUKI
@ chocolate_strawberry_

かわいいもの、スイーツ好きという共通点から「ロールケーキ」というテーマで始まったのですが、私自身よくお菓子作りをすることがあり、今回のこの企画を通して、今までは作ったものが形になれば良いかな、くらいだったのが見た目に凄く気を使うようになりました！今回の記事を通してかわいくて美味しいロールケーキの魅力を皆さんに少しでも知ってもらうきっかけになると嬉しいです。

普段ではなかなか体験できないような 体験をすることができて、感謝しかありません！ 改めて今回のeachを通して携わって頂いた方々、同じチームの方々、本当にありがとうございました！

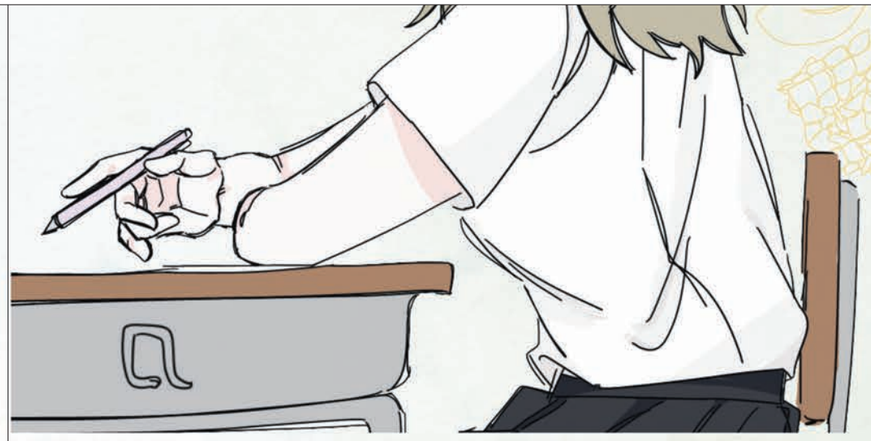
YUA
@ blueberry_glitter_

人生でまたとない貴重な経験をいただけたことが、今回一番の感想です。お菓子食べたいな、お店で作れたら楽しそうだな、そんな軽い気持ちから始まった企画でしたが、想像を大きく超える時間となりました。

デザイン志望として参加し、取材や企画に関わるつもりはなかったのですが、挑戦の機会を得られたことは大きな刺激でした。途中で悩むこともありましたが、多くの方に支えられ、最後まで走り切ることができました。複数人で協力する力の大きさを実感しました。

メインのデザインを通じて、自分自身の成長も感じています。このような貴重な機会を共に歩ませていただき、本当にありがとうございました。

「今から皆さんには、『幸せとはなにか』について考えてもらいます。期限は一週間。来週の月曜日に発表をしてもらいます。」



国語の先生の声と蝉の声が左右の耳から同時に入る。頭の中が混雑して集中出来ない真夏の、とある海のまちにある高等学校。いまだに夏休み気分な工藤澪（くどうれい）は、シャーペンをくるくる回しながら、平凡な学校生活のよくあるスピーチ課題について、テーマがなんとも小学生みたいだと心の中で思う。ただ、君は心の底から、真面目に考えたいとも思っただろう。

「周りの人と話し合ってもいいですよ。」

先生の声がけから、周りがザワザワと騒がしくなっていく。便乗して、君はひとしきり友達に聞いて回った。答えは様々だった。

「お金があれば幸せだな。」

「好きなことできてれば幸せ～。」

「世界平和が一番。」

「健康でいればいいと思ってるよ。」

皆、今の現状に幸せがある人もいれば、こうなればもっと幸せ、ああなればもっと幸せ、と願望を述べる人もいた。

その願望はお金でどうにかなるものだったり、ならないものだったりした。

話し合いが終わると同時に、授業の終わりと放課後の開始を告げるチャイムが鳴った。みんなで多種多様なお辞儀をしたあと、それぞれの意思で行動をする。君は身支度を終えるとまず、友人のクラスへと向かった。

さ、幸せについて考えてみようか。

君の友人は隣のクラスの今桜（こんのさくら）と、上野秋（うえのあき）。

君は二人を見つけるなり駆け寄っていく。桜はこちらに気づくなり、綺麗な腰までである長い髪をなびかせて、可愛い笑顔を浮かべて手を振った。秋もそれに気づいたらしく、同じように振り向いて手を振ってくれた。桜とは正反対の癖っ毛なショートボブが特徴的で分かりやすい。

「おつかれー、桜、秋。」君は二人に駆け寄り、労いの言葉をかけた。二人はあとにつづく。

「あ、澪。おつかれ。」

「ちょっと澪、今日ひま？あとでカラオケ行こうってなってたんだけど、来る？」

「え、行くわ。」

久しぶりのカラオケに誘われ、意気揚々と君はすぐさま返事を返し、三人で行きつけのカラオケへと足を運ぶ。

君の友達は、とてもいい人たちだ。桜はほわほわしているけれど誰よりも気配り上手。秋はサバサバしているけれど誰よりも友達想い。君は、そんな友達に囲まれて幸せだと感じているはず。そうか、これも一種の幸せなのかもしれないと、頭のメモ帳に書き記す道中であった。

カラオケについた君は、最初に歌う歌を考える前に、今日の国語の課題についてふと思い出した。二人にそれについて問うと、秋は眉をひそめた。

「あー、あれね。私も考え中だけど、全く思いつかないんだよな。」

「だよね。私も。」

「健康に生きてることが幸せーとか、そういうのでいんじゃね？」

「あーね。」

秋と議論を交わしながら、最初に歌う曲をデバイスで入れる。最近ハマっているとあるバンドの恋愛ソングだ。

恋がなんなのか分からなかった少女が、遂に生涯添いとげることを誓い合う男の子と出会う、という内容の歌詞。なんともまあ、普通で在り来りな。

歌い終わると、二人は歌唱力についていつも褒めてくれた。上手いねえ、高音綺麗だねえ、など。褒められるのは嬉しいので、ありがとう、と一言伝える。

「あ、私今ので思いついたかも。私の幸せ。」

「え、マジー？」

おだてられて調子に乗っていた気持ちが一気にそっちに向く。なんにでも平等に分け隔てなく接する桜の、幸せ、というのは、多少興味があった。君は桜の次の言葉を待った。

「私、女の子と結婚出来るようになったら幸せだろうなーってずっと思ってるの。」

「え？」

君はその言葉を聞いて、選曲している手が止まる。そして戸惑ってしまった。君とは裏腹に、秋は羨望の眼差しを向けた。

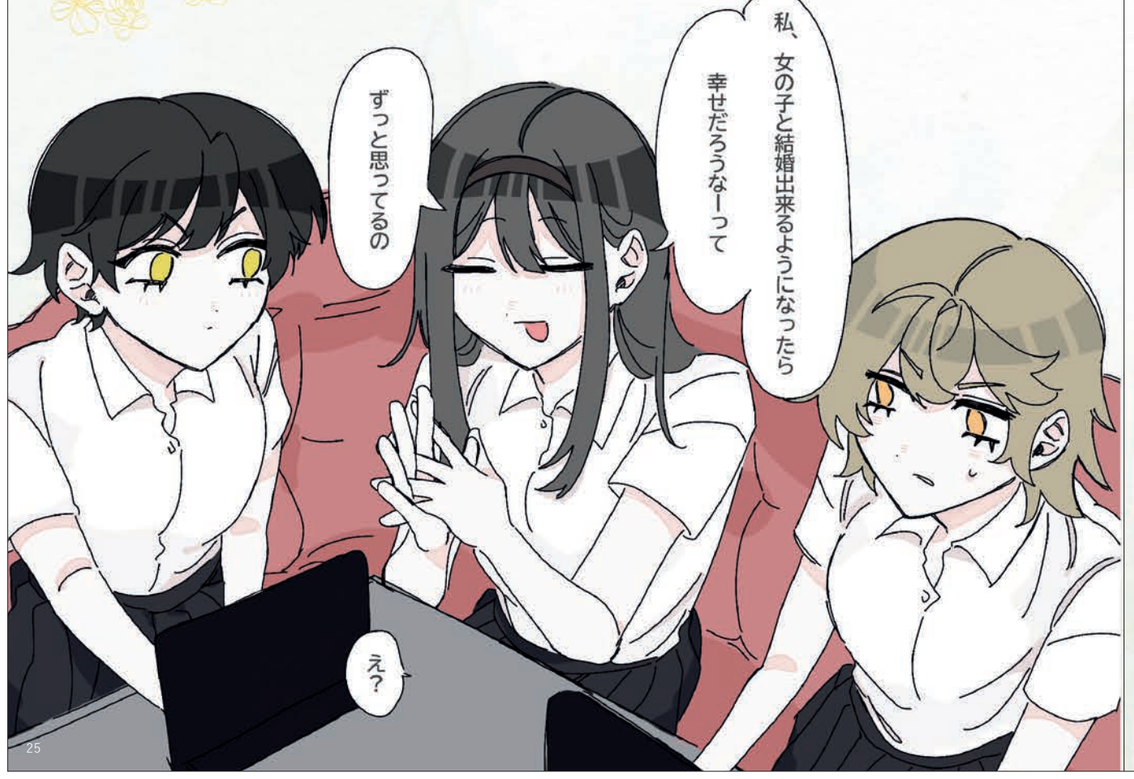
「えーいいじゃん！私も男女どっちも恋愛対象だけど、女の子はやっぱ気が合うからね、いいよね。」

うんうん、とさも当たり前のことのように受け入れている秋も、よく分からなかった。君は、今サラッとカミングアウトされた、桜は女の子が好きで秋が男女どちらも恋愛対象だという事実が飲み込めていなかった。確かめるように君は、桜に一つ質問を投げかけた。

「え、桜って、レズビアンだったの？」

「ん？あれ、言ってなかったっけ。そうだよ、私女の子大好きだから。」

茶化すように、桜は言った。いくら友達だからといって、そんなデリケートな話はやすやすと言ってはいけないのではないかと考えたが、君以外に、そんなことを気にする人間はこの場にはいなかった。



次の日、君は寝起きが悪かった。少し頭が痛くて、鏡を見ると疲れ切った顔をしている君がいた。多少なりともましな顔つきをしていればいいものを。こんな顔では、友達や両親に心配をかけてしまう。

面倒臭いけれど、仕方なく重い体を動かして伸ばしている重い髪を梳いて、タンスにかかってるスカートに足を通した。他人がいる環境では、私は私を演じなくちゃならない。今日も憂鬱を抱えながら、君は神妙な面持ちで家を出た。

外は嫌と言うほど快晴で、歩いているだけで汗が滲み出て気持ちが悪い。この暑さというのは、幸せとは程遠いなとぼんやり考えていると、トントンと肩を叩かれた。

「すみません、これ落としましたよ。」
「えっ?」

歩いていると、君は後ろから声をかけられた。どこかで聞いたような、爽やかで綺麗な声をしている人だった。見てみれば、落としてしまったハンカチを君に差し出している男。その人は同じクラスの、たしか…

「あ、ありがとうございます。えっと…田中、くん。」
「どういたしまして。裕介でいいよ、同じクラスの澪さんだよね?」
にこりと爽やかな笑みを浮かべて裕介くんは答えた。隣にはマンバン髪の、縦にひょろながく背丈が高い、あまり見かけない男もいた。君は祐介くんの問いかけに、こくりと頷く。

「えっと…隣の方は?」
「ああ、コイツ?僕の彼氏の渋谷武春っていうんだけど、ちょっと強面だから怖いよね、無口だし。後ろにやっとくね。」
「あ、え。」

君が何かを言う前に、祐介くんは武春くんとやらを後ろに追いやった。初めて喋る割には距離感がバグっているような気もするし、なんだか凄く重要なことをサラッと言われた気もする。しかし本当にサラッと言うので、君は頭の中では理解しているつもりでも体が追いついていなかった。
「え、ゲイだったの?」
「ん?うん。」

しばらく沈黙が三人の間に訪れたので、君は気まずくなり、話題を探した。

「…あ、ゆ、裕介くんは、国語の課題、考えてみた?」
「あー、幸せについて〜みたいな?」
「そうそう。私すっごく悩んでて。」
裕介くんは顎に手を当てて考える仕草をする。
「僕は、えっと…、このまま、平穏に過ごせたらなあ〜って、思うけど…」
「けど?」
「もっと欲を言うなら、叶うことなら、コイツとずっと一緒にいれたら幸せだなあって思うよ。」
「…なるほど。」
「んは、やっぱ欲張り過ぎかな?」
顔を綻ばせて、祐介くんは武春くんを見て笑った。釣られるように、無表情だった武春くんの表情が少しだけ綻んだような気がした。
昨日といい今日といい、君は心の中が複雑に交差していた。

「あれ、田中くんに渋谷くんじゃーん!おーい!」
モヤモヤする心を抱えたまま歩くと、またもや後ろからドタドタという足音とともに声をかけられた。今度は、ハキハキとして、よく響き渡る明るい声だった。
「あ、清水センパイ。おはようございます。」

「おっはよー!」
ショートヘアの綺麗な顔立ちをした人が、祐介くんの隣に辿り着く。祐介くんは君を紹介し、そして清水センパイとやらを紹介する。君は紹介にあずかって、控えめにぺこりと挨拶をした。
「は、はじめまして。」
「はじめまして!!工藤さんでいい?よろしくね!」
「はい、よろしくお願いします。清水先輩。」

「ちょっと清水センパイ、今国語の課題のことで澪がめちゃくちゃ悩んでるんですよ。ちょっと先輩の幸せも教えてくれませんか?」
「え、私?私でいいの?大丈夫?うーん…うーーーん…。」
先輩は考える素振りを見せ、考えて、考えて、考えて…考えすぎでは?
「ちょっとありすぎるから迷いに迷いまくったけど、強いて言うなら、**私は男女以外の第三の性別を作ってくれたら幸せだなあって思うかも?**」
「…な、なるほど。」
「そそ、私あんまり性別とか気にしないタイプだから。かくいう私も、自分の性別決めたくない派の人間だしさ。」
「え、それってどういう。」
「あはは、難しいよねー!私も疑問!」
「ちょっと清水センパイ、あんまり澪を困らせたらダメですよ。」
「えへへ、ごめんネ。あ、あといっぱい寝たら次の日は幸せで溢れるから好きかも!」
「はあ、なるほど。」
どうも、君のまわりにはおかしな人間ばかりが集まるようだ。…いや、実際、周りの視線が気になるからと言って自分のことを打ち明けない方がおかしいのか。

君の悩みは、さらに深まるばかりだった。

今度は君は、お昼休みに同じクラスのお友達にも幸せは何かを聞いた。
「え、私の幸せ?」
「そう、南ちゃんは、同性同士結婚できるようになりたいとか、ある?」
「うーん、私はそういうのはないけど…強いて言うなら、沢山踊って沢山寝れてることかな!」
「…ああ、南ちゃんダンス部だったっけ。」
「そ!」
身構えていた割には、あまりにも拍子抜けする回答だった。いや、最初こそこういう普通の回答が多かったものの、桜の時からといおかしくなり始めただけか。君の聞く人は皆、幸せになる為の道のりが遠すぎるから。
「ああ、なんか、普通だ。」
安堵し、思わず口から漏れ出た言葉に、南ちゃんは困惑した表情を浮かべて、君に言った。
「この世に普通なんかないよ。」
「え?」
「だって人はそれぞれだもん。そうでしょ?」
「…そうだけど。」

「ああ、もう、尚更幸せがなんなのか分からなくなってきた…」

学校の帰り道、通り雨に降られた。傘を持っていなかった君は今、近くの公園のベンチに腰を下ろしていた。今日やら最近の出来事やらを回顧していると、やはり最近のことだけで一生分のコミュニケーションをした気がする。皆、幸せが重すぎる。
「君、大丈夫?」
ぐったりと体勢を崩していると、前からオーバーサイズの服を着た、七三分けの黒髪の人が現れた。
「あ、大丈夫です…。」
えへへ、と愛想笑いをする。

「ああ、もう、尚更幸せがなんなのか分からなくなってきた…」
でもだいぶ顔色が悪かったみたいで、お兄さんは君のとなりに座り、ミネラルウォーターを差し出した。
「まだ口付けてないから安心して!」
にっかりと笑うと八重歯がきらりと光る、笑顔が素敵なお兄さんだった。
「あ…ありがとう、ございます。」
「いえいえ。」
有難く一口飲ませてもらった。
「で、何があったのかい?」
お兄さんは顔を覗き込んで、心配そうに眉をひそめた。君は、思っていたよりも張り詰めていて、友達が簡単に他人に自分のアイデンティティを言ってしまうこと、軽蔑されないのかと不安にならないのかということなど、ダムが決壊して水が溢れ出るように、抱いていた疑問を吐き出した。
「…だからこういうことをどうして皆、当たり前みたいに口にするのかなって。」
お兄さんは相槌を打ちながらも、話に割り込まずに親身になって聞いてくれた。なんだかお兄さんは、初対面なのに安心できるような距離感にいた。
「最近、国語で幸せについて考えて発表する課題が出されて。皆、一歩間違えたら軽蔑されるようなことばかり言うんです。私、よく軽々しく言えるな、ってずっとモヤモヤしてて。」

「へえ、そりゃあ難しい課題だな。」
「なんでだろうなって。」
「…」
君はやっと、抱いていた疑問を吐き出したはいいものの、次の言葉はどう言葉にしていいか分からなかった。そんな君を、お兄さんは君をじっと見つめ、真面目な口調で淡々と述べた。
「俺は、元は女性として生まれてきたよ。俺、今の名前は陽だけど、前は違った。」
「え!?」
「んは、驚きだろ?」
その通り、君はとても驚いた。お兄さんにしか見えなかったから。
「最初は、そりゃあ、スカートとか、性別を書く欄とか、体育の時間とか、女性の方だったさ。でもずっと違うと感じてきた。」
「…」
「だから、全部周りに言ったんだ。そりゃ怖かった。否定されるんじゃねーかって。でも、そんな事はなかった。俺は、俺が思うより環境が良かったんだよ。」
お兄さんは天を仰いで、深呼吸をする。
「君は、好きなものを好きと言えるかい?」
「え?えっと…言えます。」
「何が好きなんだい?」
「うーん、チョコレート、とか。」
「ふは、そうかそうか。美味しいよな。」
ふふ、とお兄さんは微笑んだ。
「そのお友達たちは、それと同じ感覚なんだよ。自分の好きなもの、嫌いなもの、何が趣味で何が特技で、とか。その程度のもの、自分のことを伝えることに、抵抗はないだろう?怖がることはないんだ。」
「…」
「そうだな、つまり俺が言いたいのは…」
むむ、とお兄さんは考える素振りを見せる。君は惹き込まれるように、お兄さんの次の言葉を待っていた。
「君は君のままでいい。当たり前だけど、凄く難しいことだ。」
「…!」
「でも、君は環境がいい。環境が悪い人たちは、いつまでも自分を出せず苦しんでいく。同性同士の結婚も認められないし、二つしかない性別から逃れられることはできないし、男女の関係は他人から見たら絶対に恋愛がついてくるし、人は見た目で判断してしまうし。でも、個人の主張は自由だ。君はいつまで、自分を塞ぎ込んでいるんだい?」

「私、…僕、は…。」
君は黙り込んでしまった。でも、次に顔を上げた時には、君の焦茶色の瞳は澄んでいた。お兄さんは、満足気に君の背中をバシッと叩いた。
雨はすっかり晴れて、空には虹がかかっていた。

日差しが眩しい。週明け月曜日の今日、いつもは寝起きが悪くて頭も重く、気分は最悪なはず。でもこの日は違った。珍しく寝起きが良かった。頭が軽く、制服を着る動きも軽々しかった。その違いは、当たり前に両親も気づく。
「随分澄んだ顔してるじゃない。」
「そりゃあね。」
母はそれ以上何も言わず、父も君に微笑みかけるだけで何も言わなかった。君は、その温かさに嬉しくなり、その温かさをもったまま家を後にした。
「はい、それじゃあ先週出した課題について考えたな〜?出席番号順に発表していけー。」
順番に、クラスの人が発表していく。ご飯を沢山食べれることだったり、いっぱい寝ることだったり、平穏に過ごすことだったり、恋人と過ごせることだったり。
みんな自分の主張を恥じず、怖がらず話せている。そして、皆それを受け入れていた。
「はいじゃあ次。工藤。」
呼ばれたとき、君はセットした髪をなびかせて、歩く度にズボンの擦れる音を感じながら教壇に立った。
「僕の、幸せは＿＿＿」

小説執筆にあたり取材協力をしていただきました。

「はこにじ」の皆さん、ご協力ありがとうございました！！

LGBTQのコミュニティスペース はこにじ とは？

一般社団法人にじいろほっかいどうが運営する、雑談してもよし、遊んでもよし、
一息ついて休むのもよしの自由に過ごせる性的マイノリティ当事者たちのコミュニティスペース！

自分の性について悩みがある方や、他の当事者の人に会ってみたい方におすすめ！！

函館 VIVID!!

取材後に、道内3か所と青森で開催される**LGBTQ＋の若者向けイベント「VIVID!!」**に参加してきました！はこにじのスタッフさんは面白くて優しく、みんなでお菓子を食べたり、恋バナをしたり、おもちゃで遊んだり、まったり過ごせて、とても充実した時間でした!!

「はこにじ」の情報

北海道函館市元町2-9

0138-76-0074

開館日は公式HPをご覧ください

インスタグラムは下記QRから

イベント情報を更新中！

今回取材をさせていただいた方々

登場するキャラクターのモデルにもさせていただきました!!

りょうすけさん
おしゃべりが大好きなにじいろほっかいどうの理事長さん。
アイデンティティはゲイ。

あさひさん
笑顔が素敵なにじいろほっかいどうの事務局長さん。
アイデンティティはトランスジェンダー。

みきぽんさん
とても明るく元気なVIVID!!のスタッフさん。
アイデンティティはクエスチョン。

編集後記

福田千蒼　小説担当

「読みやすく、分かりやすく。」をモットーにした結果、期限を破るなど相方の春やeachのスタッフさんには多大なるご迷惑をお掛けしましたが、皆さんのおかげで無事執筆し終えることが出来ました。
LGBTQ+は、題材にするとどうしてもシリアスなってしまうところが悩みでした。なのであえて、LGBTQ+が受け入れられている世界での物語にしてみました。
この作品を通して、LGBTQ+を知って頂けたなら光栄です。
改めて、この作品を作るにあたり、取材に協力してくれたはこにじの皆様、及びeachスタッフの皆様、そして素敵な挿絵を描いてくれた春、ここまで読んでくれた読者の皆様、貴重な体験をありがとうございました。

佐藤春　挿絵担当

eachに初めて参加して大変な作業もありましたが、Gスクエアスタッフの田村優奈さんに助けてもらったり、千蒼に指示を出してもらったりで最高の紙面を作れたと思います！自分で思っていたよりも挿絵を描くことになって、一時はどうなるかと思いましたが、千蒼の天才的な小説のおかげで挿絵をウッキウキで描くことができました！題材のLGBTQ＋はかなりデリケートな問題で、こうやって大っぴらに言葉にして表すことはなかなかないと思います。eachを通して貴重な体験ができてすごく楽しかったです！取材にご協力していただいたはこにじさん、eachのバックアッパーのみなさん、つきっきりで作業を手伝ってくれた優奈さん、最高の小説を書いてくれた千蒼、ありがとうございました！あたしは左の黒いほうです

パンパンッと柏手の音が響く。
本日は元旦。わたし、新川ちとせはただいま年末年始で東京から地元・函館に帰省中。現在は午後二時。実家でゴロゴロしていたら母に「初詣くらい行ってきな」と尻を叩かれ船魂神社に来たところだ。
本殿の前で合わせた手を顔の前に持ってきてギュッと目を瞑る。ええとお願いごとは、まず健康でいられますように。給料上がりますように。あと彼氏できますように。旅行も行きたいし、おいしいものもいっぱい食べたいな。それから、それから……。そこまで考えて、ふっと脳裏についこの前までいた職場の風景が浮かんだ。せっかくの休みなのにと思いながら少し強く目を瞑る。
……もうちょっと、会社で上手くすごせますように。

「はあ……」息を吐いて、白い息が霧散するのを見送る。見上げた空は曇天。雪は降ってないけど、すぐにでも降り出しそうな様子だ。人気がないことも相まってなんだか物寂しい景色。神社を出たわたしは暇だったので少しぶらつくことにした。サクサクと雪を踏みながら、さっき神社でしてきたお願い事を反芻してみる。
何願ったっけ……。お給料のこととか。あとなんだっけ。あんま覚えてない。
……あ。もう一つ願い事を思い出して立ち止まった。そうだ。会社で上手く過ごせるようにって願ったんだっけ。今考えると抽象的な願いだったかも。上手くいくようにってわたし、結局どうしたいんだろう。
……東京での生活はどこか忙しなくて、きちんと自分のことを考える時間ってそんなになかったかもしれない。せっかくゆっくりできる機会だしちょっと、考えてみようかな。

わたしは今、東京の中小企業で働いている社会人二年目の普通のOL。順当に四年間の大学生活を終え、受かった企業に入社。今年の四月に部署異動を言い渡され、ただでさえ人見知りのわたしは人間関係の再構築に現在進行形で苦労中。
それから後輩も入ってきて曲がりなりにも「先輩」になった。とはいえ自分も異動してきたばかりで「先輩」をできる技量はそんなにない。でもその後輩がわたしにばかり質問してくる。わたしより他の人にすればいいのにと思いつつ断るのも悪いし上司にも言いづらい。
そんなことでって言われるかもしれないし――とまあ、少しモヤモヤを抱えながら年末をむかえた。
…考えてたらちょっと暗い気分になってしまった。モヤモヤを吹き飛ばすように頭をふる――と。
「――――」
誰かに呼ばれたような気がして、ふと立ち止まる。ずっと下を向きながら歩いていたから気が付かなかったけどいつのまにかペリー来航広場に来ていたみたいだ。ここはまあその名の通り、かの有名な黒船を率いてアメリカから日本にやってきたペリーの銅像があるただの広場。なんとなく入ってみる。いつのまにか雪は降り始めていて、銅像の頭や台座にもその影を落としていた。
「ん……？」
台座の下に何かが見えた気がして目を眇める。まだそんなに積もってないから余計目立つな。足を進めて銅像に近づいていく。
「……本？」
台座の上にあったのは、分厚い本。表紙は雪に隠れて見えない。それをはらおうと手袋を脱いでコートのポケットに入れると、ふと背後に誰かの気配を感じた。振り向こうする途中に視界に映ったのは裾の長いドレス。頭に「？」が浮かび怪訝に思いながらその人を見る。「へ？」思わず声を上げて固まってしまった。その人がどう考えてもこの時代とこの場にそぐわない格好をしていたからだ。中世の女性が着るようなドレス。でも顔は完全に日本人なので多分明治時代の人みたいな感じ。
……いやいや。この令和の時代に、そんな人いないでしょ。教科書でしかみたことないよ。もしやコスプレ、とか？ 正月に、人気のないここらで？ 趣味、なのかな……。それならつっこまないほうがいいのかも。ぐるぐる考えながらその人を見つめる。彼女はそんなわたしににこっと微笑みかかる。わ、キリッとしてるけど優しい笑顔だなあ。

「あの……？」
その意図するところがわからず苦笑いを返す。すっと彼女が差し出したのはわたしの手袋。
「あ……ありがとうございます」
ポケットに入れてたのが落ちちゃったんだ。格好はアレだけど、普通に親切な人だな。
さっきで若干引き気味だった自分が恥ずかしくなったのを誤魔化すように、いそいそと手袋を装着する。
「それじゃあ……」
ちょうどいいタイミングだと思いペコリと頭を下げその場を去ろうとする。
知らない人とふたりきりなのも少し気まずいし、もともとこの広場に用が合ったわけじゃないし。
「あ、ちょっと待ってお嬢さん」
「は、はい？」
まさか呼び止められるとは思ってなくて思わず肩が跳ねる。わたし、何か忘れてるかな……。……あれ？忘れてるといえば、さっきまで手に持ってた本はどこいった？や、でもこの人が呼び止めてるのはそのことじゃないよね。あの本、多分誰かの忘れ物……のはずだしまあ、ほっといてもいいか。
そう思いつつちょっぴりドキドキしながら振り向く。彼女はさっきみたいな笑みを浮かべてパチンと手を合わせた。
「ねえお嬢さん、突然なのだけれど少し私の昔話に付き合ってくれるかしら？」
……本当に突然すぎる。
「あの、それは一体どういう？」
さすがに意味がわからない。けれど彼女は表情一つ変えず続ける。
「いえね。小一時間ほど、話を聞いてくれるだけでいいのよ。ダメかしら？」
「あーいや、ダメってわけではないんですけども、」
ううーん。よくわからない人だけど、危害を加えそうには見えない。
わたしもこの後予定があるわけではない。思考がだんだん「まあいいか」に傾いていく。
……年明けくらい、よくわからないことに巻き込まれてみてもいいのかも。
「……わかりました。少しなら大丈夫です」
「あら、本当？」
嬉しそうに顔をほころばせる彼女を見ると、断らなくてよかったと思う。
……待って。もしかしてわたし、こんなんだから後輩に質問攻めにされるのかな……。
「わたし、新川ちとせといいます。あなたは？」
「あら。名乗ってなかったわね。私はトネと申します」
「トネさん、ですか」
サクサク、サクサク。自分の足元をひたすら追う。会話はそれっきり。自分から聞いてほしいといったのに彼女――トネさんは微小を浮かべたまま前を見つめてる。歩き始めて十分以上立ってるんじゃないんだろうか。
――ザッ。突然トネさんが立ち止まった。わたしもあわてて足を止める。よろけそうになるのをなんとか耐えて顔をあげる。
「ここって……」
着いた場所は海、だ。いや、海というか海が見える場所。奥に見えるのは多分緑の島。冬の海の景色はどことなく物悲しい。トネさんはそんな風景を穏やかに見つめている。
「ふふふ」とかすか笑い声を上げた彼女に視線をやると、「懐かしくって、思い出し笑いしちゃったわ」とさらに口角を上げてこちらを見た。
「懐かしいっていうのは？」
そんなことを言われたら気になってしまう。トネさんはまた海を見つめて口を開いた。やっと話し出すのかな。
「ここにね、ペリーが来たのよ。その時私は家にいて、父は読経の最中だったの―家がお寺だったから―。そこに人が呼びに来たもんで、あわてて見に行ってね」
……ちょっと待って。いや、服装からして普通の人ではないとはわかってたけど……。それにしたって予想の斜め上の発言が出てきた。
ペリーが来たのって百年以上昔のことでしょ？確か…一八〇〇年代。
……頭の整理がつかなすぎて頭痛くなってきたよ。その時代の人がこの二〇二五年にいるなんてどう考えてもありえない。わたしはなんて反応すればいいのだろうか。まさかトネさんがからかってるようにも思えないし……。
つまり彼女はずっとむかしの人で、なんらかの理由で現代にいる、と？まさか幽霊的な？それともタイムスリップをしたとか。
いや、どれもにわかには信じがたいけど、そう考えるほかない。まあ今日は正月だし……。うん。神様が今日ぐらいって気まぐれで不思議なことを起

「同じ、一人の人……」

トネさんがさらっと言ったその言葉はなぜだか胸に引っかかった。

「うん。だからさっきの『かわいい水兵さん』を見たみんなは積極的に話しかけに行って、お運びが来た婦女子もしまいには紳士たちだって一緒に写真を撮ったりもしたものよ」

彼女はニコニコと笑いながら忍らしボカンとしているであろうわたしの顔を見てさらに顔のしわを深くする。

「あ、でも言葉一言葉はどうしてたんですか？外国語、当時は学べる環境なんて……」

疑を引き締めてふっと浮かんだ疑問を口にする。

「環境？」

彼女は目を丸くした。

「環境なんてないだって、自分と相手がいればそれで十分対話は成り立つわ。言葉がわからなかったら聞けばいい。メモを取って覚えて。多少カタコトでもなんてことない。身振り手振りで伝えられればいい」

そうでしょ、というように潤んだ瞳でこちらを見るトネさん。その瞳をわたしは見つめ返せなかった。ふっと視線をそらして「すごいですね」としか返せなかった。

もらして目を細めた。

「そうね。そう思ってしまうのも無理ないかもしれないわ。……でも、ありきたりな言葉だけれど、人を見た目で判断するのは悪いことだと思う」

「悪いこと？」

そこはズバッと良くないことだと言うかと思ったけど。

「ええ。だって……誤解されたままって悲しいけど、誤解する方だってその人の本当の姿を知らないままなんて……。外国人にも良い人はたくさんいるのよ」

彼女の伏せた瞳はその「外国人」が映っているように見えた。

「私、幼いころは身体が弱くてね。日本人の医師はもう諦めてしまったのだけれど、アメリカ人の医師が治してくださったの。赤子の頃だから憶えているはずがないのに、不思議と胸裏に焼き付いていて……。眼病にかかった時もそうだわ。彼らは無償で治療してくれた。こちらもお礼にものをあげたりして」

「なんか、意外と仲がいいんですね」

思ったままをそのまま言います。

「意外かしら？私たちはただ、彼らを『外国人』としてではなく『同じ一人の人』として見ていただけよ」

ちょっとそっぽを向いてしまった。

「そうね。そう思ってしまうのも無理ないかもしれないわ。……でも、ありきたりな言葉だけれど、人を見た目で判断するのは悪いことだと思う」

「悪いこと？」

そこはズバッと良くないことだと言うかと思ったけど。

「ええ。だって……誤解された方だって悲しいけど、誤解する方だってその人の本当の姿を知らないままなんて……。外国人にも良い人はたくさんいるのよ」

彼女の伏せた瞳はその「外国人」が映っているように見えた。

「私、幼いころは身体が弱くてね。日本人の医師はもう諦めてしまったのだけれど、アメリカ人の医師が治してくださったの。赤子の頃だから憶えているはずがないのに、不思議と胸裏に焼き付いていて……。眼病にかかった時もそうだわ。彼らは無償で治療してくれた。こちらもお礼にものをあげたりして」

「なんか、意外と仲がいいんですね」

思ったままをそのまま言います。

「意外かしら？私たちはただ、彼らを『外国人』としてではなく『同じ一人の人』として見ていただけよ」

こしたのかもしれない。

よし、これ以上考えるのやめよ。深く考えすぎたまには流されてみるのもいいかもしれない。

「それでね……あら、どうしたの？」

一時思考停止していたわたしをトネさんが眺めてくる。

「あの、いえすみません。どうぞ話を……」

続けてください、と言いかけて、彼女が何者なのか聞けばいいじゃないかと思い当たった。

「あの、トネさんはいったい、その、誰なんでしょうか？」

それを聞いて彼女は目をパチクリとさせたあと、「んー」と口に手をあてた。

「私は……そうね、最後にわかると思うわ」

要領を得ない回答にわたしは「ああ……」と微妙な返答をして話の続きを促す。

「ええと、どこまで話したかしら。そうそう、黒船にのってたペリーが来てね、弁天まで行くとちょっすごい人だかりだったの」

「それは、みんな黒船を見に、ですよね」

わからないながらもなんだか面白そうな話だなと思って、つい口をはさんでしまった。

「そうね。堀に穴を開けて、そこから覗いて。奉行たちは顔を青くして馬を走らせて、役所まで行ってねえ」

「あはは、そりゃいきなり外国船が来たらビックリしますよね」

学生時代にそこらへんのことを習ったときもあんまり黒船が来たこととか良い印象なかったし。

「お役人さんたちにとってはね。私たちにも、『アメリカ人は豪淫、多欲、短気ゆえ婦女子を隠すよう』なんてお達しが来たのよ」

彼女は「でもね」と付け足した。

「やってきた水兵たちは木魚なんかを面白がってうちち叩いてみたり、それを全部買い取ったりもして。それから踊りだすものまでいて」

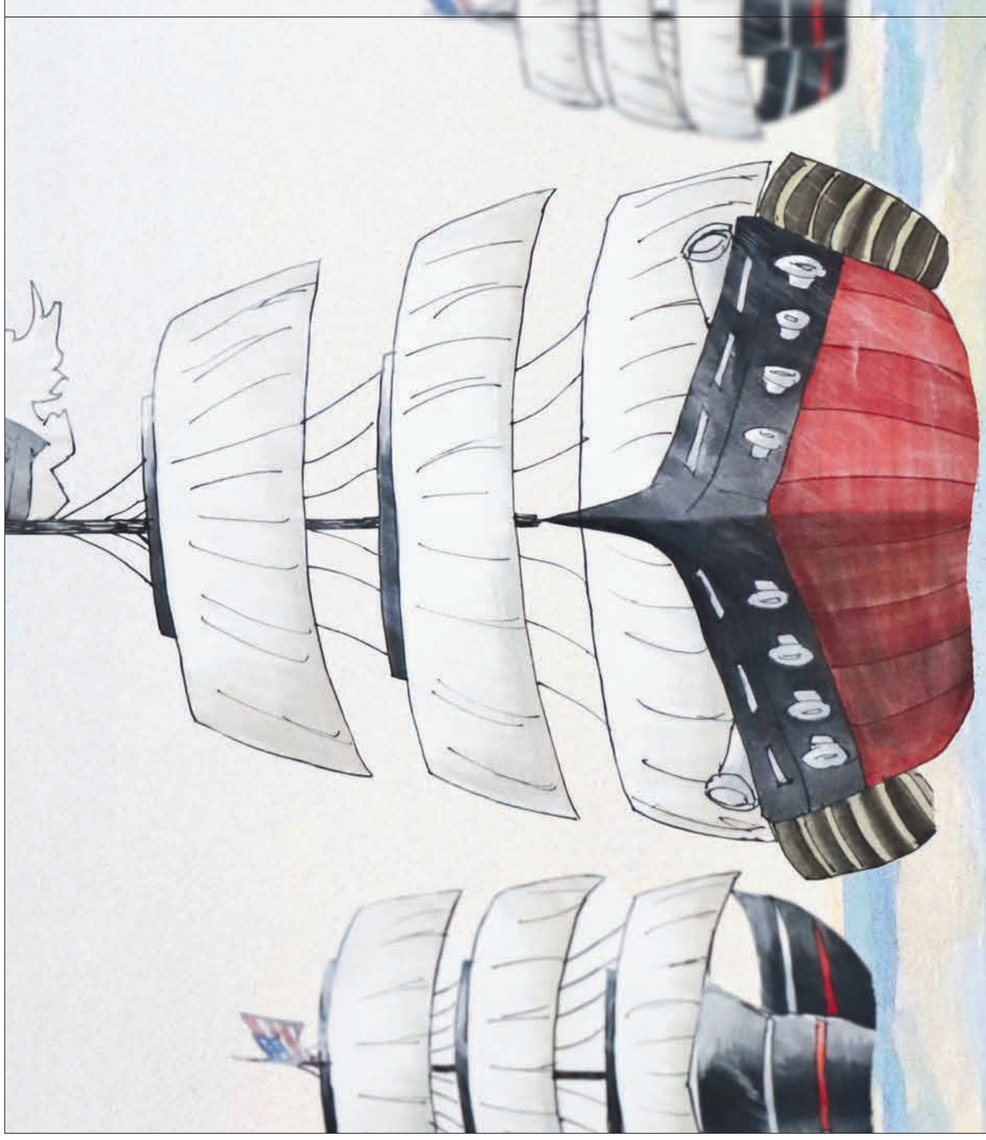
想像してみる。もの珍しそうに木魚を叩いて踊るアメリカの水兵たち。

「……かわいい」

思わず呟いたわたしにトネさんはアッと声を出した。ちょっと恥ずかしくなって早口で付け足す。

「あ、いや。ちょっと意外だなって思って。当時の外国人ってもっと野蛮な感じだと思ってたので」

それを聞いた彼女は「あぁ……」と



……だって、彼女や当時の図書館の人たちは今のわたしと変ってすぎる。勝手にいろいろと感じて顔を横にそむけてしまった。

「どうしたの？」

トネさんはそんなわたしを心配げな表情で覗いてくれる。

「い、いえ。なんでも」

直接目を見ないようにしながらそう返す。

「なんでもないわけ……。ねえ、私でよければ話してくれないかしら。話すだけでも少しは楽になれると思うわ」

「トネさん……」

その言葉に何かが切れてしまいたくなる。溢れた涙に耐えられなくて、

「はい……」と頷いてしまった。

「わたし、あんまり勉強が上手くいってなくて……」

わたしたちは近くのベンチに座って海を眺める。手のひらに挟まれてはこぼれていく言の葉を拾いながらポツリ、わたしは話し出した。

「部署を異動になって、あーそど、働く環境が変わってですね」

一〇〇年以上前の人に部署やら異動やらが伝わるのかわからないで、言葉を訂正する。

「そこの上司の人たちとか冷たい感じもするし。後輩の質問に対応してると正直自分の仕事が遅れちゃうというか……」

すべてを吐き出して「ふう」と息をつく。それから「でも」と付け加えた。「トネさんの話を聞いて、少しドキッとしたんです」

彼女は少し不思議そうな顔で首をかしげる。

「外国人が来たとき、怖がらなかったどころか話しかけに行って、英語もわからないなりに勉強して話そうとしたの、すごいなって思ったんです。ちゃんと対話しようとしたんだなーって。……わたし、本当はわかってるんです。困ってるなら直接後輩に言うなり、上司に相談なりすればいいって。でも勇気がなくて。だめですよね、社会人がこんなんじゃ」

……なんか言ってるうちに恥ずかしくなってきた。これじゃあ自分の醜態を晒してるだけなのでは。しかもトネさんがなにもいわないものだから、よけい気まずい。と思っていたら、彼女は口を開き始めた。

「……その上司さんは、本当に冷たいのかしら?」

「……へ?いや、まあわたしの感想なのでそれはなんとも……」

なんかさっきわたしが話してたこととズレている気がする。ちゃんと聞いてたのかな……。ってことはアレはただのわたしのひとりごと? またもや恥ずかしくなって雪が降っているというのに顔が熱くなってきた。

「私ね、イギリス人と結婚したの」

わたしが勝手に赤くなっているとトネさんはまた昔話を始めた。

「そう、なんですか。というかその時代、国際結婚とかできたんですね?」

「そうね……。できたにはできたけれど、やっぱり色々あったわ。特に宗教ね。夫ージョンはキリスト教徒。私は住職の娘だったから……。周りからは受け入れてもらえなかった。でもね」

彼女はそこで言葉をとめて、わたしをまっすぐに見つめた。

「あの人は私にとって大切な人。異国人だからって悪い人ではない。ジョンを一人の人として愛しているから……」

あ、「人として」って、さっきも言ってた。

「私はね、差別……壁って、人の心の中にあると思うの」

「あ……」

その言葉が胸に重くのしかかってきた。

……なんで彼女がこの話をしたのか、わかった気がする。わたしのは差別とは違うけど……。でも上司に相談しても意味がないんじゃないかとか、自分の仕事ができないのも後輩のせいにしている部分も少し、あった。そんなの、考えてるだけじゃわからないのに。それがわたしの『壁』なのかも。

「……ありがとうございます、トネさん」

「どういたしまして?こちらこそ、私の長い話を聞いてくれてありがとう」

お互い言い合って、ふっとどちらも笑い出す。

「それじゃあ、広場に戻りましょうか」

……もしかして。歩きながら思う。神社でわたしが「職場で上手くいきますように」って願ったから、神様がトネさんを連れてきてくれたのかな。

そんなことをぼんやりと考えているといつのまにか広場に着いていた。雪はやんでいて、雲の隙間から青空が顔をのぞかせている。

「それじゃあちとせちゃん、また会いましょう」

「あ、はい。また」

反射的に返しながら、「また」なんてあるんだろうかということが頭をよぎった。

――ゴオオッ。

ふいに強い風が吹いて積もった雪を煽る。それはわたしから視線を奪ってトネさんが隠れてしまった。風がやんだ頃には……彼女はいなくなっていた。

……もう一回、ちゃんとお礼言いたかったけど。

少し惜しく感じながら帰ろうかと足を踏み出すと、視界の端に見覚えのあるものを見つけた。近づいて見てみると、それは本だった。トネさんに会う前、拾った本。表紙の雪をはらうと出てきたのは……

「トネさん……?」

『女の海溝トネ・ミルンの青春』の文字と白黒の写真。これ、どう見てもトネさんだ……。え?ええと、つまりトネさんは、この本の中から出てきたってこと?

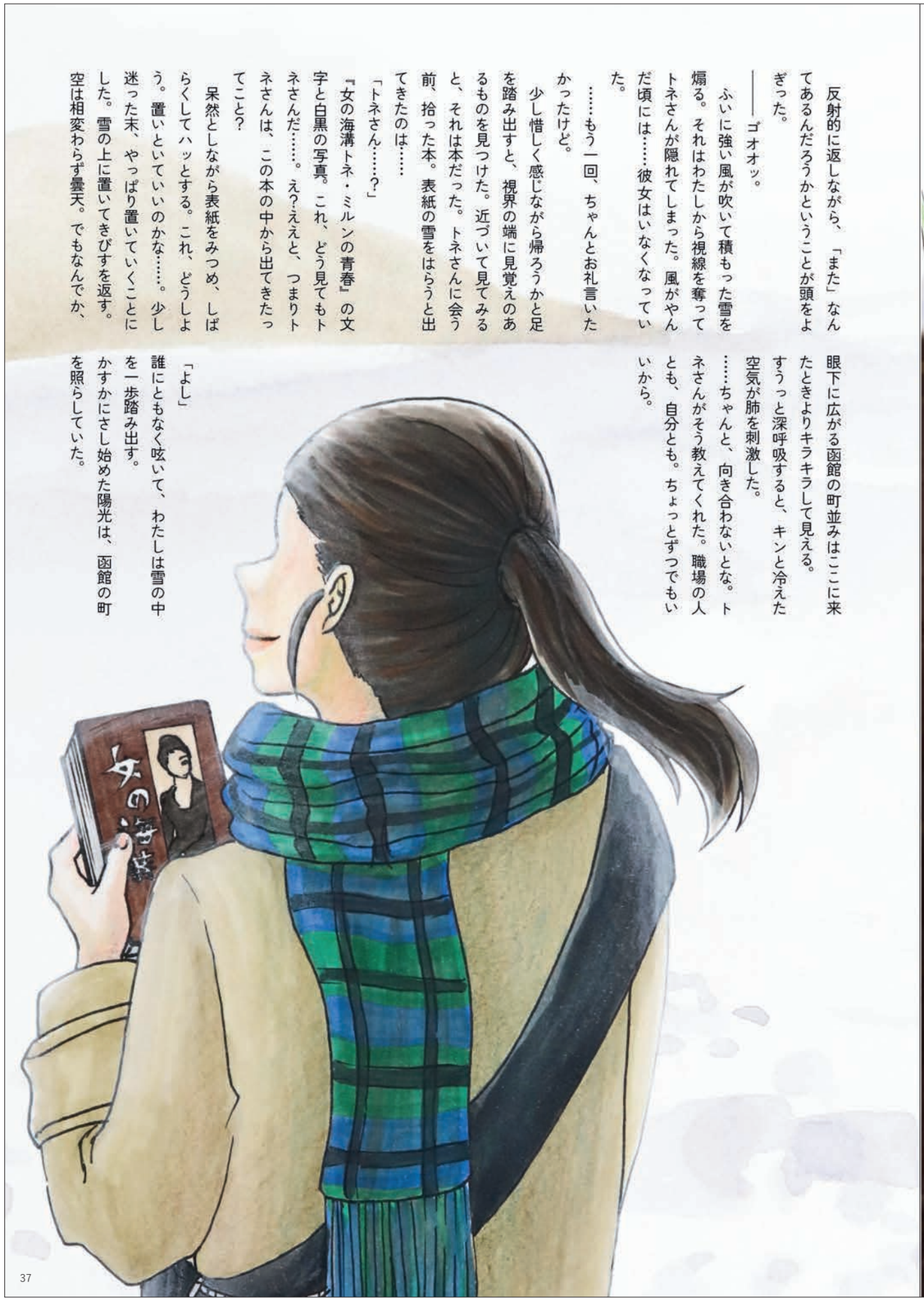
呆然としながら表紙をみつめ、しばらくしてハッとする。これ、どうしよう。置いといていいのかな……。少し迷った末、やっぱり置いていくことにした。雪の上に置いてきびすを返す。空は相変わらず曇天。でもなんでか、眼下に広がる函館の町並みはここに来たときよりキラキラして見える。すうっと深呼吸すると、キンと冷えた空気が肺を刺激した。

……ちゃんと、向き合わないとな。トネさんがそう教えてくれた。職場の人とも、自分とも。ちょっとずつでもいいから。

「よし」

誰にともなく呟いて、わたしは雪の中を一歩踏み出す。

かすかにさし始めた陽光は、函館の町を照らしていた。



まちのスキマ、増えてます。

change-to-bright

函館市では、少子高齢化や人口減少の影響で、空き家が年々増えています。特に歴史ある西部地区では、使われなくなった家や建物が、まちの中にぽつんと残されたままになっているケースも少なくありません。私達の通っている西高校の近くの西部地区でも空き家が増えているのを知って、「空き家＝問題」では終わらせたくない！そんな思いから空き家問題に興味を持ち始めました。実は今、そんな空き家を『活かす動き』が少しずつ広がっています。

今回は、函館の大学・大学院・高等専門学校生が函館をもっとよい街、魅力的な街にする為、主体的にイベント企画や商品開発を行っている学生団体ISARIBI withの「活きる空き」さんにお話を伺いました。どんな思いでどんな活動しているのか、一緒にのぞいてみましょう！！

「活きる空き」って？

「活きる空き」は、函館市内で増え続ける空き家や空き地を、ただの問題ではなく、まちを元気にする資源として活かそうとしているプロジェクトです。古くなったけど味のある建物や、誰も使わなくなった空き地を有効に活用したり、空きをきっかけに、新しいつながりや活動が生まれています。このプロジェクトは、「もったいない」という気持ちを大切にしながら、「どう魅せる？」をみんなで考えていくのが特徴。地元の人たちの声を聞きながら、一緒にまちの未来をつくっていこうとしています。

実際に「活きる空き」の活動を動かしているのは、どんな人たちなのでしょうか？

空き家を活かすというアイデアの裏には、地域を思い、行動している人たちの存在がありました。今回は、その中心で活動しているプロジェクト発案者の名畑さんと現リーダーの三浦さんに話を聞きました。

それぞれの思いや、地域との向き合い方に注目です。

僕は活きる空きのキャラクターだよ！！一緒に活きる空きの活動をのぞこう！

なはたきみはる
名畑公晴 さん

プロジェクト発案者！

函館駅前の空きビルを見て「まちがもったいない」と感じたことが、「活きる空き」構想の原点。学生団体ISARIBI withの企画として提案したところ共感が集まり、プロジェクトが始動。「空いているけど活きている」という状態を大切に、通りかかった人の目に自然に入る表現をなどを通して、空き家の新しい見え方を提案し続けています。

みうらなずな
三浦なず菜さん

名畑さんから受け継いだ現リーダー！

去年の活動を通じて「自分がやらなければプロジェクトが続かないかもしれない」という責任感から、リーダーを引き継ぐことを決意。現在は、後輩にも役割を担ってもらいながら、無理なく次の代へ引き継げる体制づくりに力を入れ、活きる空きの魅力を広げています。

「あなたの中に壁はありませんか？」

函館はかつて、開港都市としてアメリカから来たペリー提督とその一行を迎え入れました。その際、函館の人々はどう対応したでしょうか？私たちは当初、「受け入れるのに時間がかかったのではないか」と考えていました。しかし、小川先生に取材する中で見えてきたのは、「好奇心を持って接する両者の姿」でした。

小説の中では実際に存在した、イギリス人と国際結婚を果たした日本女性である、トネ・ミルンを対話相手に話が展開していきます。

参考文献：森本 貞子著（1981）「女の海溝 トネ・ミルンの青春」文藝春秋

編集後記

著：Camellia

前号に続き小説を書かせていただきました。最初はどんな記事が出来上がるのか見当もつかず、一方でワクワクしている自分もいました。誰かと一つのものを作り上げる楽しさにも改めて気づき、良い経験となったと感じています。今の私の精一杯を詰めましたので、楽しんでいただけると幸いです。

イラスト（線画）・カメラ：なごみ

今回初めてeachに参加させて頂きました！Camelliaさんの素敵な小説にイラストを通じて深く関われたことは貴重な経験であったとともに、皆さんと楽しい時間を過ごすことが出来ました。このeachをやっていて、仕事をするには勉強以外にも様々な能力を持ち合わせることが大事だと気づきました。

イラスト（色塗り）・デザイン：はまの まい

私は今回eachに関わることが初めてで、取材に伺ったり、チームの皆で一つのものを制作する工程全てが刺激的でした！作業としては、全挿絵の色塗りを担当させていただいています。Camelliaちゃんの心揺さぶる小説と、なごみちゃんの可愛らしいイラスト線画に花を添えることができて光栄です✨

取材協力

はこだて外国人居留地研究会・副会長
小川 正樹 先生

小説の中で扱う、開港都市の歴史や人々の様子について取材協力していただきました。ラ・サール学園の教頭先生として働きながら、外国人居留地研究会の副会長として活動されています。和洋折衷の建物が立ち、かつては開港都市として栄えた函館の歴史を、市民の知的財産として残すことを目指し活動されています。この度は貴重で興味深いお話をしていただきありがとうございました！

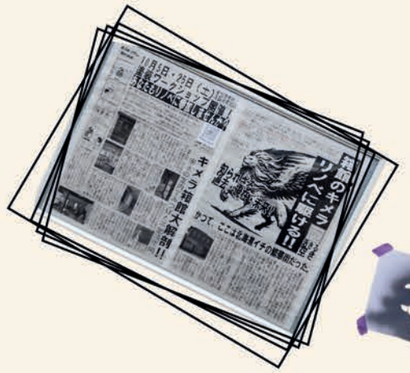
01 「空き」を「活きる」に変えるそんな挑戦の根底には

このプロジェクトの根本にあるのは、ただの空き家や空き地を「問題」として放置するのではなく、「空間資源」としてポジティブに見せることで街の印象を変えたいという強い思いです。函館の中心部にはまだまだ多くの空き物件があり、再活用の取り組みは進みつつも、なかなか追いついていません。だからこそ、空いている状態のままでも活きていると感じられる工夫を続けることが大切だと「活きる空き」の名畑さんは話します。実際に「活きる空き」さんへの取材を通して、このプロジェクトが単に空き家の個別問題に向き合うのではなく、エリアという広い視点でまち全体のイメージを少しずつ変えていこうとしている姿勢がすごく素敵だなと感じました。

たとえば、通りかかる人の視線を意識した色やデザイン、飾り付けといった工夫があちこちに施されており、まちを歩く楽しさや新しい発見につながっています。印象的だったのは、インタビューの最後に三浦さんが語ってくれたこんなエピソードでした。

「この前、自動車学校の帰りに乗ったバスで、運転手さんが『函館ってなんもないっしょ』って言ってたんです。もちろんその方は私がこういう活動をしているなんて知らない。でも、なんで自分のまちを自分から卑下するんだろうって、ちょっと悲しくなりました。嘘でもいいから函館、いいまちだよって言えばいいのにって思ったんです」。

日々の暮らしのなかで、自分のまちを誇れること。誰かと話すとき、少しでも期待や希望を持って語れること。そのきっかけのひとつになれるように。「活きる空き」は、そんな未来を目指して、今も活動を続けています。



02 ボロいけど面白いから始まった「キメラ箱館」

活きる空きさんの活動が動き出したのは、弁天町にある不思議な建物「キメラ箱館」からでした。そこは、明治の土蔵、大正の住宅、昭和の弁当工場という異なる時代の建築様式がつながった、建物。西部まちぐらし共創サロンの街歩きで外観を見た名畑さんは、まだリノベーションの途中だったこの場所に、最初は「古いな、ボロいな。」という印象を持ったそうです。でも、よく見るとその中には、重なり合う時代の記憶やストーリーがぎっしりと詰まっていて、「もったいない。こんなに面白いのに伝わってない」そんな想いから、実績もないまま、思い切って「活きる空き」の活動を提案すると、新しい家主さんが共感してくれ、まちに開く第一号のプロジェクトが実現することに。名畑さんが印象的な出来事として語ってくださったのは、シャッターアートを完成させた後のことです。通りがかった中学生がふと「まちが明るくなったね」とつぶやき、その一言を耳にしたとき、活動がまちにポジティブな影響を与えていることを初めて実感したのだそうです。

03 点から面、そして連鎖へ——広がり始めた“活きる空き”の波

今後について、二人は「単なる装飾や情報発信にとどまらず、『こんなこと、学生にできるんだ！』と驚かれるような、大胆な企画にも挑戦していきたい」と話していました。たとえば、まちの中心地や駅前といった、これまではなかなか手が届かなかった場所で大規模なアクションを仕掛けること。そのような人目に触れやすい場所での取り組みは、活動の存在を一気に広め、より多くの人々にプロジェクトの魅力を伝える大きな可能性を秘めています。

さらに、今後は地域内だけでなく、外部のアーティストやクリエイターとの協働も構想されています。まちの外からやって来る新しい視点を取り入れることで、これまでにない独創的なアイデアが生まれるかもしれません。これはプロジェクトの次につながる大切なステップだと言えそうです。「活きる空き」はまた、単発的な取り組みにとどまらず、点から面へ、そして面からさらに連鎖するモデルへと発展させていくことを目指しています。そのためには、これまで積み重ねてきた活動を大切にしながらも、「もっと面白くするためにはどうすればいいのか？」という問いを常に抱き続けていきたいと名畑さんは語ります。

小さなアイデアから始まり、やがてはまち全体の空気感にまで影響を与えていく——そんな広がりを秘めている「活きる空き」。函館というまちに、期待と創造の風を吹き込み続けるこのプロジェクトは、まだ何者でもない学生たちだからこそ実現できる可能性に満ちています。その不安と希望が入り混じる感覚こそが、次の一歩を踏み出す原動力になっているのだと、話を聞いて強く感じました。

04 空き家からはじまる、みんなの文化祭

インタビューの中で特に印象に残ったのは、「年中文化祭をやってるようなもの」という言葉でした。空き家や空き地の活用と聞くと、最初はどうしても難しそうだったり、堅い印象を持ってしまいます。けれども、活きる空きさんの活動を知るうちに、それがまるで地域みんなで楽しむ大きなイベントのように感じられてきました。実際、取材でお話を聞いた人たちも、笑顔で活動のことを語っていて、その雰囲気がとても心地よかったのです。

建築やまちづくりというと、資格や専門的な知識、さらにはお金まで必要で、学生や若い人には遠い世界の話のように思えるかもしれません。でも、二人が話していた「学生でもできる」という言葉には、もっと身近で、もっと自由な挑戦ができる場所なんだというメッセージが込められていました。最初の一歩を踏み出せば誰でも参加できるし、その一歩を歓迎してくれる空気がここにはあるのです。

私たち自身も、高校生ながらこうして取材をしたり、記事を書いたりすることが、決して小さなことではなく、自分たちなりの第一歩だと感じています。

この雑誌『each』を手に取った皆さんにも、「自分も参加できるかも」と思ってもらえたらとても嬉しいです。ぜひ、活きる空きさんたちの活動を一緒に体感してみてください。きっと、空き家の新しい可能性や、まちの面白さに気づけるはずです。

編集後記

川本 美羽

函館西高校三年生のみうと言います！
今回、学校の探究活動の一環でeachに参加させていただきました。主にデザインを担当させてもらいましたが、私自身得意ではなく、たくさんの方々にアドバイスを頂きながら最高の誌面を作ることができたと思います。

「活きる空き」さんにインタビューをして、「空き家」をまちの課題ではなく、それも魅力としてポジティブに捉えることが大事だと思いました。また、活動の柔軟さにも驚かされました。実際にイベントを開いたり、アートを取り入れたりすることで興味を持ってくれる人が増え、協力してくれる方が増え、まち全体の雰囲気を明るくしていることにつながっていると感じました。

私も空き家をよく見かけますが、「もったいないな」と思うだけで終わっていました。でも、視点を変えれば地域を元気にできるチャンスになるのだと分かり、まちづくりにとっても大切な考え方だと思いました。

QUESTION

活きる空きの"忍者"は合計何人いたでしょうか？

答えはページ下↓

この活動に参加したい方！！
隣のQRコードからDMにメッセージを送ってくれ！

坂上 こころ

私は函館西高校3年生のこころといいます。主に文章を担当しました。同じく探求の一環で参加させていただきました！

今回の取材を通してわかったことは、「空き家」は決してネガテイブな存在ではないということです。最初は正直、「空き家って暗い話題なんじゃ？」と身構えていましたが、取材を進めるうちにそれが「ワクワクする場」に変わっていく様子が想像できました。お二人から、活きる空きさんの様々なアイディアや考えを聞くたびに、聞いている私達まで楽しくなってしまうくらい素敵なものばかりでした。

特に印象的だったのは、忍者のキャラクター。最初はユニークでかわいいなと思っていましたが、活動の象徴として「空き家に潜む新しい可能性を発見する存在」のようにも感じられて、ますます好きになりました。紙面にもたくさん登場させてしまったのは、その魅力を一緒に伝えたかったからです。

このインタビュー記事を通して、活きる空きさんの想いや工夫を、ぜひ忍者と一緒に覗いてみてください。また、学生さんやまちづくりに興味のある人などが、これを読んで「自分もできるかも…」と思ってくれたら嬉しいです！

答え：20忍

みちどこどこいしょ！
～語って！運営のみちどこハイライト～

みちどことは？

中高生の寄り道どころ、略して「みちどこ」
一般社団法人いとのこ、Gスクエア、大学生が協力して活動中！
中高生にとっての「居場所」となり、日常と学びが繋がる場を目指しています。
中高生とカードゲームや雑談を楽しんだり、ワークショップや地域食堂を企画したり…
いろいろなことに挑戦しています！

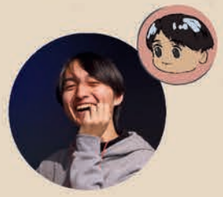
企画説明

みちどこの活動は一見中高生とただ遊んでいるだけに見えるかもしれません。けれどそこには大学生や大人たちの熱意や葛藤が込められています。今回はそんな活動の裏側を明らかにするために、初年度から関わってきたメンバーにお話を聞いてみました。

今回取材したメンバー

じょじょ

公立はこだて未来大学博士課程１年生
みちどこ運営チーム。
散歩が趣味。好きなパンは塩パン。
夏休みSPで誰よりも楽しんでいた。



てんてん

北海道教育大学３年生
みちどこのリーダー。運営チーム。
趣味は探検。好きな野菜はきゅうり。
2年生のときにゆっかと夏休みSPを担当。

ゆっか

北海道教育大学３年生
みちどこ運営チーム。
好きな給食は栗きんとんパイ。
好きな飲み物はオランジーナ。

初回からみちどこに関わっている唯一の学生メンバー、じょじょ。みちどこの3年間でどんなことがあったのか語ってもらいました。

3年間の成長とともに見えてきた「楽しさ」——今のみちどこは最初と比べてどう変わったと思いますか。

立ち上げ当初「みちどこがこうなったらいいな」っていうのは全くなくて、楽しいから参加していた。高校生と喋って、ついでに何か伝えられればいいなーくらい。そもそもみちどこのスタートは、いとのことのスクエアが何かやろうって動き始めて、僕はお手伝いとして関わってた。活動の目的も僕知らなかったかも。それが今では、活動の規模も大きくなって、学校の先生にも知られていてすごいよね。最初はみんな高校生と喋るのを楽しんでいたけど、今は活動を発展させる楽しさも増えて、楽しさの種類が変わってきたかも。僕の中でも、自分が楽しむだけじゃなく、大学生自身が楽しんで、活動に意義を見出せるように支えられる存在でいたいと思うようになった。

課題に向き合った、本気の始まり——みちどこのターニングポイントだと思う出来事はありましたか。

去年の4月、活動後に残ったメンバーでみちどこの将来について話してた。きっかけは、のスクエアスタッフの耳に入ってくる、高校生が抱えている課題。僕もその課題を聞いて、本格的にみちどこをやろうと思った。教育に関わっていて見えてきた課題を見過ごしてはいけない気がした。こうした課題に対して「みちどこが何かできないか」と「運営チーム」が発足した。この日はみちどこにとってもターニングポイントだったと思う。運営チームでは活動を振り返って、これから何をしたらいいか、とにかく話し合った。

そこから今日まで運営チームとしてやってるけど、実は僕自身みちどこ哲学みたいなものはあんまりなくて、メンバーの情熱的な想いを整理して、全体に還元していくのが僕の仕事だと思ってる。みんなで意見を発散して、僕が整理してまとめる。これっていいバランスだと思ってて笑。貢献しているのかは分からないけど、それでも「じょじょがいなきゃ」って言ってくれたのはすごく嬉しかった。

——みちどこがこれから伸ばせると思う部分はありますか?

去年「可能性を拡げる」というコンセプトを掲げて、教育的な活動を大事にしていきたいって思ってた。今の活動はその面で、まだ頑張れるんじゃないかなって。これは批判ではなく「まだいけるんじゃない?」って感じ。みんなの作ることに違うというつもりはなくて、教育的に良いものにするためにどうすればいいか考えるきっかけを、これからも作れればいいなって。

昔の自分に見せたい「理想の今」——みちどこの規模が大きくなって嬉しかったこと、寂しくなったところを教えてください。

みちどこに魅力を感じて、大事だと思ってくれる大学生がこんなに集まって、長く続けてくれる人が増えて嬉しい。今は高校生のためにって目的をもって、みちどこが発展して多くの人にも認められてきて。みんなが参加する意義を見出せる場所があるって素敵。大学生も大人も熱狂して生き生きと活動するのは理想だし、高校生にとってもいいことだと思う。

最初は高校生とカードゲームをしてはしゃいで、振り返りはちょっと真面目に。それが今は現場に行くと「じょじょ先輩どうしよう」という視線を感じて、みんな真剣だからこそ、最初の頃のように純粋にはしゃげない寂しさはある。この前高校生と恋バナしてめっちゃ盛り上がって、大人なのにうるさいって怒られたときは、懐かしさを感じて楽しかったな。後輩の前だとちゃんとしなきゃって思って、それがプレッシャーになってる節はあるかも。ただ最初の頃に戻りたいかと言われるとそうではなくて、今のみちどこを昔の自分に見せたら「めっちゃいいじゃん」って言うと思う。だから今の姿はかなり理想的なんだと思ってる。

みちどこのリーダーを務めるてんてんに想いや葛藤を語ってもらいました。

——みちどこに対してどんな想いをもっていますか?

みちどこは「自分に本気で向き合ってくれる場」。中高生にとって普段接点があまりない大学生との関わりや対話の中で、自分や世界に対する新しい発見と出会い、向き合う機会を作りたいと思っています。また、中高生にとって大学生と関わることが非日常体験となり、将来ふとした時に思い出してもらえる「いい記憶づくり」も目指しています。

——どうしてそういった場を目指そうと思ったのですか?

僕の高校時代は「勉強することが正しい道で、生きる意味」だと思っていました。そんな価値観の下で、家と学校の往復、会う人も友達と先生と家族の繰り返しで、自分の興味や生き方を考える余裕はありませんでした。だから成績は良くても中身が空っぽだと思いこんでいました。大学に入って自分の話を沢山聞いてくれた経験があったので、自分と本気で向き合う場って必要だと思うようになりました。

——リーダーとして苦労したことはありますか?

主に2つあって、1つは新学期です。新学期は後輩がみちどこに加入してくる時期で、自分たちが大事にしてきた価値観を伝える必要がありました。でも、それまで感覚でやってきていたので、価値観を言語化するところに苦労しました。

もう1つは「みちどことは何か」を考えることです。みちどこは正解がなく変わり続ける活動なので、「みちどこって何のためにあるんだろう」ってずっと考えてました。リーダーとしてみちどこの意味をメンバーに伝えていかなければならず、常に迷い続けて、未だにしっくりする答えは見つけられていませんが、活動の中で目指している瞬間に近づけたときはすごく感動します。みちどこの意味が感じられて、やっててよかったなと思えるんです。

みちどこ運営メンバーのゆっか、てんてんと担当した「夏休みスペシャル(SP)」は、彼女の大学生活を変える大きな出来事だったと言います。その裏側にあった葛藤と成長の物語を聞きました。

『やらなきゃ』だけで動いていた準備期間——夏休みSPを任された当初の気持ちを、今振り返っていかがですか。

正直、自分たちが中心になって進めるとは思っていませんでした。『あ、私たちが企画するんだ』という驚きが大きくて。企画の経験もなく、クラスのお楽しみ会のような感覚でしたね。何を決めればいいのかも分かっていない状態で。最後に大人がまとめてくれると思って、ぼんやり作業を進めていました。今思えば『やりたい』より『やらなきゃ』という義務感だけで動いていたなと反省しています。笑

いちばん大きな転機となった"雷"——叱られた出来事と、そのときの焦りや気持ちを教えてください。

イベント当日の3日前です。大人メンバーに準備の進捗を聞かれた時に、ほとんどをてんてんに任せきりで何も答えられませんでした。何を聞かれても「分からない」しか言えなくて。その瞬間叱られました。「なんで分からないの?やる気ある?」と雷がドカーンって。頭が真っ白になって、冷や汗が止まりませんでした。自分のせいで一緒に頑張ってきたてんてんまで叱られている…。申し訳なさでいっぱいだったけど、それ以上にショックが大きくて。『頑張っていないわけじゃないのに、なんでこんなに言われなきゃいけないんだろう』。当時本気で辞めたくて、『私、みちどこ辞めるかも』とてんてんに伝えていたほどです。

「辞めたい、でも…」苦しさから前向きな気持ちに——追い詰められた気持ちから、どう変化していきましたか。

しばらくは本気で辞めようと思っていました。あの"雷"を自分の中で消化するのに結構時間がかかったんです。もちろん『みちどこ』の活動は楽しいけど、もともと運営をガツガツやりたかったわけじゃない。でも、周りのメンバーはすごい熱量で活動に打ち込んでいる。その姿に、自分との温度差を感じてしまい「私にはあそこまでの熱量はないな」と苦しくなることもありました。自分なりに頑張っていたつもりだったのに叱られて、『やっぱり私無理かも』と。でもみんな頑張ってるから、私も頑張ってみようと思い始めました。やっぱりみちどこ楽しいしやめるのは違うかなと、ちょっとずつ頑張ろうってなっていった感じです。

叱られたからこそ見えた景色——夏休みSPを終えて、特に嬉しかったことは何ですか?

準備期間中一緒に作業をしてくれた高校生の子たちが当日来てくれて、自分たちが作ったものを楽しそうに見てくれている姿は嬉しかったですね。それから、スタッフ側が誰よりもイベントを楽しんでくれていたのを見て「良かった」と、とても安心しました。

——あの「叱られた経験」を、今あらためてどう捉えていますか?

あの出来事がきっかけで、物事に対する意識が変わりました。元々受験に失敗して函館に来てて、何事もマイナスに捉えがちだったけど『もう少し頑張ってみよう』と色んな事をプラスに考えられるようになりました。周りの人から見ても、今の私の方がずっと明るいんじゃないかな。もしあのとき本気で叱られていなかったら、打ちこめることもなく、私の大学生活はきっとこんなに楽しくなかった。そう思えるくらい、私にとって大切な経験です。でももう二度と叱られたくない。笑

※夏休みスペシャル(SP)とは?

中高生の夏休みに、大学生が企画して一緒にご飯を食べ、共同制作を通して、目的達成に向けてチーム全員で協力する年に一度の一大イベントです。

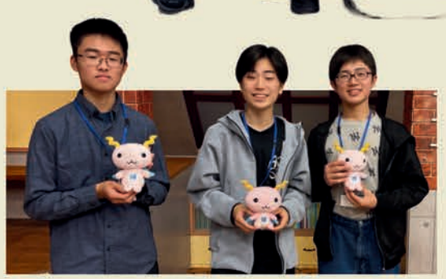
何かいっしょにやってみない？

―学生団体あくせる―

あくせるってなに？

身の回りの課題解決活動から生まれた団体。二〇二四年四月より学生団体の形態で活動開始。「このまちをもっといい場所に！」をテーマに他分野の活動に取り組む。昨年は高橋豪太を代表とし、中学生十人で活動した。二月には「第一回学生音楽フェスティバル」を開催し、現在、第二回開催に向けて活動中。

現在は、秋山和寛を代表とし、中高生十四人で活動中。イベント出店や、函館マラソンボランティア、町会活動サポートなどを行っている。



学生のみなさん！何かいっしょにやってみない？

学生にもできることがある！学生にしかできないことがある！学生の力は無限大！

僕たちと一緒に活動しませんか？学生音楽フェスティバルでは学生メンバー募集中！詳しくは次のページで！！

学校さん！何かいっしょにやってみない？

学校の活動でもっと実践的にまちに出てみよう！生徒の力を最大限に！

企業さん！何かいっしょにやってみない？

企業の皆様とも協力し合い、このまちをさらに良いまちへ！パートナー企業募集中！

あくせるにアクセス！

Web site　SNS

←次のページへ

あとがき　座談会

～インタビューの感想聞いてみた～

（じょじょ）それぞれの記事読みあっての率直な感想気になるかも。

（てんてん）うん。確かに。

（ゆっか）てんてんの取材は、普段てんてんが言わないことを言ってるって思った。リーダーとしてちゃんとかっこいいこと言ってるなって。

（じょじょ）ゆっかが親とかてんてんに相談してたの知らなくてびっくりした。

（てんてん）逆に僕、ゆっかがまだ辞めなかったことにびっくりしてた笑

（ゆっか）3月に「ゆっかってそういえば辞めないの？」とか言われて笑

（じょじょ）まさかゆっかがこんなに追い詰められてたなんて笑。活動のフィードバックって難しいー。

（てんてん）むずかしい

（じょじょ）今年は新入生が30人も入ってきて、大学生でより良いものをつくるために、全員に活動の目的を伝えるとか、新入生にアドバイスする場面が増えたんだよね。

（ゆっか）うんうんうん

（じょじょ）でも指摘するのって一歩間違えればパワハラみたいなことにもなりそうで。逆に触れすぎないとぬるくなっちゃう。そのバランスをとるのは大変だったね。

（ゆっか）パワハラのラインむずいですね。線引き。

（じょじょ）来年も新入生いっぱい入るかもね。

（ゆっか）でも、今年の30人は来年先輩の30人。

（てんてん）お～～、すごい

（ゆっか）任せますよ、まじで。

（じょじょ）おーーー。

（てんてん）うわー、確かに。

（じょじょ）そっか。てんてんとゆっかもう動かなくなるかもね。上から指示出してるだけかもしれないよ。

（ゆっか）お茶汲んできてー笑笑

（てんてん）まさかの笑笑

（じょじょ）はいはい、話戻すよ笑。僕は取材でちょっと話してたんだけど2人はなんでみちどこに？どういう目的の団体だったかは知ってた？

（ゆっか）知らずに入りました。

（じょじょ）みんなそうなんだね笑。じゃあなおさら理由が気になる。

（ゆっか）私、教員になりたくて大学来て、先生になりたいし、中高生と関われるから損ないな～と思って。

（てんてん）僕もよくわかんないけどなんか面白そうみたいな感じで

（ゆっか）結局みんな一緒、なんか楽しそうだから笑

（じょじょ）奇跡的な。みんなこうなるなんて想像してなかったもんね。

こうして、運営の夜はまだまだ続く…

最後までご覧いただき本当にありがとうございました！

インタビューと座談会の全文はこちらからチェック！

私たちが作りました！
みちどこ編集チーム

学生が創る音楽フェスティバル

第二回開催決定

昨年度二月に第一回を開催した学生音楽フェスティバル。学生だけで企画・運営を行いました。この度、第二回の開催を決定しました。

企画・運営はすべて学生

企画・運営などはすべて学生で行っています。大人の手を借りつつも、「学生が創る音楽フェスティバル」をテーマに開催します。第二回のテーマは「スカッシュ」。学生ならではのよさを楽しんでいただけるよう、一生懸命準備します！

一緒にやりたい中高生

イベントを創り上げるメンバー募集中！あくせるメンバーと一緒に活動しませんか？？他ではできない唯一無二の経験。少しでも興味があればご連絡ください。

スポンサー募集中

イベントスポンサーを募集中です。個人スポンサーから企業の大口スポンサーまで。詳しくはお問い合わせください。（締め切り　一〇月五日）

出演エントリー

現在、出演エントリーを受け付けております。エントリー団体を選考後、結果をご案内します。採択された団体様は本団体サポートの元、学生さんに各ステージを創り上げていただきます。詳しくはお問い合わせください。（締め切り　九月二十一日）

お問い合わせ

メール・LINE・Instaramから。
(Instaramは返信が遅くなる場合があります)
どんなことでもお気軽にお問い合わせください。

E-mail　aku.hakodate@gmail.com

AKUSERU_STUDENTS

STREET PHOTOGRAPHY

BY each

青春の１ページを切り取るストリートスナップ。

「当たり前」に過ぎてしまう一瞬を「特別」な一枚に。

それぞれの日常が交差する街の中心地。
ここでのかけがえのない一瞬も、くだらない一瞬も、君の現在地になる。

写りたいと進んできてくれる子から、嫌だと照れながらも実は撮って欲しかった子まで。
12月からストリートスナップ企画をスタートしてから、沢山のフレッシュな学生たちと接してきました。
10代の自分もこうだったな～と思う半面、夢や目標を自分の言葉で真っ直ぐ答えてくれる
”素直”さは羨ましいとまで思う瞬間も多かったです。
人生何があるかわからないからこそ、目で見たものを大切に。
沢山笑って、沢山遊んで、沢山食べて、大きくなってください。
そうしたら、僕みたいに少しずつ体型も丸くなってきます。（SHINPEI BANDO）

Photo / Page design by SHINPEI BANDO (SHASHINPEI)
Edit by YUNA TAMURA (G SQUARE)

これは「私たちの現在地」だ。

それぞれの個を肯定するため始まった「each」。
会場となるＧスクエア周辺には、毎日多くの若者が集まります。
勉強もおしゃべりも、自由にできる場所だからこそ見えてくる“らしさ”や”表情“。
そんな日常に映る瞬間を切り取るべく「ストリートスナップ企画」に挑戦しました。
この一枚が、いつかのあなたの”今日”を思い出す標になりますように。

みんなに聞いてみた！
①最近のマイブーム
②将来の夢

今日買ったばかりというバンダナの出番到来！
ブルーがアクセントになっていい感じですね。
①スケボー
②ショップ店員

近くのコンビニへ買い物に行くところをキャッチ。
眩しい陽射しが似合う夏らしい１枚！
①スケボー・ギター
②社長・ヘアメイクアップアーティスト・消防士

今年、函館を離れて大学へ進学！
久しぶりの帰省中にも立ち寄ってくれました。
①タワーに登ること！
②世界中を笑顔にできる起業家

①服を digること
②ビッグな漢になる！

それぞれが夢の理由を自分の言葉で語れることに驚き。
撮影中の３人の関係性も◎
①音楽を聴くこと
②騎手・ホテルマン・理学療法士

夏だからこそのスタイルで、
ノリノリな二人が登場！
①食べること
②まだ決めれてない！

久しぶりの待ち合わせ場所に。
それぞれの進路に進んでも、変わらず集まれるって素敵！
①遊戯王
②2 人で畑をやること・船を買うこと・バンドマン・スノーボーダー

STREET PHOTOGRAPHY

お母さんがきっかけで聴き始めた HIPHOP。
お気に入りは 2Pac ！
①HIPHOP
②東京でサラリーマン！

バス待ちの数分間で撮影！将来の夢は
バスケでお世話になったことがきっかけ。
①オタ活（Nissy）
②理学療法士

縁が映える手入れされたスニーカー。
念願叶って抽選購入できたという大切なもの。
①漫画
②ものづくりの道へ

普段は野球に打ち込む３人組。
寮も一緒で、ほとんどの時間一緒にいるそう。
①HIPHOP・音楽を聴くこと・Netflix
②教員・自動車整備士・野球選手

未利用食材活用プロジェクトにインターンとして
参加していた大学生。
作業や打ち合わせに毎日奮闘！
①ムール貝
②函館を変えられるような影響力を持つ人
・一緒に過ごす人を幸せにできる人

部活は違えど、趣味が合う二人。
お揃いのニコちゃんマークの靴下が目印！
①サッカー・バスケ
②サッカー選手・バスケ選手

「笑ってみて！」と伝えたら、大爆笑。
部活や学校でも、いつも楽しそうに
過ごしていることが伝わってきますね。
①バスケ
②みんなで定期的に会って仲良く幸せに過ごすこと！

大好きなお母さんのバンダナやベルトを
全身に散りばめたコーデに目を奪われます。
①母のアイテムを使ったコーディネート
②加害者ケアに携わりたい

創刊から5年目を迎えた『each』。
これまでの歩みを振り返るなかで見えてきた、
このローカルマガジンの価値とは？
バックアッパーが本音で語り合った
座談会の模様をお届けします！

バックアッパー座談会！

2025

個々の変化に見るeachの5年間

岡本　ついに『each』も5号目！毎回大変だけど、あっという間だったなぁ。

阿部　5年前は今よりもバックアッパーが少なかったし、杏奈と果瑚はまだ大学生だったもんね。当時からワークショップの設計はやってたんだっけ？

大室　私たちが暮らしていた『わらじ荘』というシェアハウスは、ワークショップが大好きだったのでよくやってましたね。私と杏奈さんは、雑誌作りよりも学生のみんなが自分の意見を出したり、他者と協力するプロセスに興味があったので、その支援をするのが楽しかったです。

下沢　雑誌作りを、ワークショップのための手段にしていた感じだよね。

大室　そうそう。だけど、途中から意識が変わりましたね。やっぱり雑誌をちゃんと形にしないことには、学びも生まれないと思ったんです。それからはワークショップの方向性を変えました。

阿部　最初は雑誌作りよりも、チームビルディングに重きを置いたワークショップだったもんね。だけど、それってお互いにとって都合がよかったんだと思う。雑誌を作る側からすると、ワークショップでチームの意思疎通ができていくことは願ったり叶ったりだし、ワークショップを作る側としては雑誌作りはいい題材だったってことだから。

下沢　本当にいい題材でした！だけど、5回やっても「いかにのめり込んでもらうか」を考えてワークショップを設計するのは難しいですね。毎回悩みながらやってます。

田村　私は今年からバックアッパーとして参加して、最初に困ったのは「個を肯定する」というeachの哲学をフィードバックや誌面に落とし込むことでした。単にいい記事になればいいのではなく、「その人らしさ」ってどういうふうにしたら出てくるのかなって。そこはずっと悩みながらやっていましたね。

阿部　回を重ねると慣れてはいくけど、そうするとオンライン開催とか演劇とか、また新しい取り組みを始めるからずっと楽にはならないよね（笑）。実際、毎回すごく疲れるじゃん。「each熱」とか言ってるけど、みんなが高い熱量を持ってこの場に臨んでいるからだと思う。

下沢　梨紗も「明日eachだから早く寝なきゃ」って言ってたもんね（笑）。

北村　早く寝ないともたないんですよ、頭も体も（笑）。

岡本　梨紗は何号目から参加してくれたんだっけ？

北村　2号目ですね。1号目のときはまだ高校生で、大学で函館に来た年から参加しています。最初はデザインに興味があって参加させてもらって、すごく楽しかったので3号目では取材も執筆もデザインもやりました。4、5号目はサポーターとして声をかけてもらった感じです。

阿部　立場を変えながら横断的にやってきたeachの申し子だ！制作メンバーがサポーターとして関わってくれるのって、立ち上げ当初に思い描いていた理想の関係性なので嬉しい。梨紗は自分で『標』って雑誌を作ったりもしていたよね。

北村　やばい、恥ずかしい。でも、eachに参加していなかったら標は作れなかったです。取材して記事を書くなんてできなかったし、自分で雑誌を作ろうと踏み出すこともなかったと思います。

藤井　すごいよね。撮影から執筆、デザインまでやったんでしょ。1人でeachを作っているようなものだもん。

北村　上手くいかないこともたくさんあったけど、標を作った経験は就活でも力になってくれました。面接のときも、お守りのようにカバンの中に本を入れてましたね。就職先は出版系ではないんですけど、イベントや場の編集みたいなことができそうなので、そういうところでまた本や冊子を作れたらなと思っています。

雑誌作りではなく苦楽を共にする場所？

大室　each以外でも学生と関わることがあるんですけど、最近は人とぶつかることを避けたり、感情が動くのを嫌う子が多いように感じます。超平和主義というか、和を乱したくないみたいな考え方の子が。社会調査の結果を見ても、そういう傾向が強いみたいですね。ぶつからないようにしているので和は乱れないけど、関係性は薄いっていう。

岡本　それって、なんでなんだろう。単純に世代の話なのかな。

大室　この前、大学生の子が「人生で初めて喧嘩した」って言ってたんですよ。相手にムカつくことがあって、お互いに言いたいことを言い合った結果、傷つけるだけで終わって、離れ離れになっちゃったみたいで。でも、それって望んでいたことじゃないですよね。思っていることをちゃんと伝えるのって、また一緒に頑張るための手段のはずだから。なんか、喧嘩が下手だなと思ったんですよね。

北村　私も友達と喧嘩はしないですね。モヤモヤしても飲み込んで終了。最近やっとAーに相談するようになりました。

藤井　なんて相談するの？

北村　「こういうことがあって、こう感じたんだけど、どう思う？」みたいな。Aーって同情してくるので、ドライに回答してもらっています。それを聞いて、「そうなんやね」って思って寝ます。モヤモヤしていることを人に直接言ったことはないですね。そういう憧れはありますけど。

藤井　憧れ!?

北村　嫌なことがあったり、モヤモヤする人がいても、距離をとるという選択肢しかないんですよ。ぶつかっちゃったら、それでもう人間関係終了みたいな想像しかできないから。なんで言えないんだろう。どうせわかってもらえないと思ってるからですかね。相手にムカつかれている時点で「きっと私が間違えているんだ」みたいな気持ちになります。

阿部　そう考えると、eachでやっていることって真逆だよね。「自分の意思を大事にしよう」とか「お互いの意見をぶつけ合おう」とか。

大室　eachは雑誌を作るという目的があるから、意見をぶつけ合いながらも建設的な議論ができるじゃないですか。喧嘩だって、モヤモヤを解消するとか、誤解を解くことが目的だったら、傷つけ合うだけではなく話し合えるはずなんですよ。

阿部　時代と逆行している場所であることは、もしかするとeachの存在意義のひとつかもね。むしろ、そういう場として打ち出したほうがいいかもしれない。「雑誌作りを教えます」ではなく、「人と一緒にものを作る苦楽を経験をしよう」みたいな。

下沢　「喧嘩の舞台、用意してます」みたいな告知にしますか（笑）。

岡本　意見のぶつかり稽古だ（笑）。

阿部　そこが本質かもね。eachの卒業生には別に雑誌作りの道に進んでほしいとは思っていなくて、違う業界でもここでの経験を思い出したり、活かしてくれたら嬉しいな。

挑戦が歓迎され失敗が許される環境

大室　改めて思ったんですけど、伝えたいことを伝えるのって簡単じゃないですよね。学生時代って、そんなに言葉を選ばなくても

共感し合えるコミュニティにいることが多いじゃないですか。「やば」とか「すご」とか「ウケる」とか。だけど、雑誌を通して自分のコミュニティ以外の人に伝えるには、言葉を磨かなきゃいけない。その体験はeachに参加することの大きな学びだなと思います。社会に出たら言葉を駆使しないと伝えられないし、わかり合えないし、先に進めないこともあるから。

阿部　俺もフィードバックのときに「すごいって書いてるけど、もう少し噛み砕くとどういうこと？もうちょっと言葉にできそうじゃない？」みたいな話はよくしてるな。

大室　それって普通に言ったらちょっと意地悪に聞こえるけど、読み手に伝わる紙面を作るって目的があるとフィードバックが正しいものになるじゃないですか。その正当性は大事だと思っていて。だからこそ正直に言えるし、学びにも繋がるんだろうなって。

藤井　雑誌を作るという目的があって、そのなかでぶつかり合える。喧嘩ではなく、ひとつの目標のためにみんなが言い合えるのがeachのいいところだよね。

岡本　自分がやりたいってことをやり通せたっていうのは、何よりの自信になるしね。誰かにやらされたわけでもなく、人の顔色を窺うわけでもなく、自分がやりたいと思ったことが形になるわけだから。

田村　だからこそ、「eachに参加するのを決めたのは自分だ」って意識は大切にしてほしいですね。自分で選んだから、しっかりやる。大人になったら、自分の選択は自分で責任を持たなきゃいけないから。

北村　私はeachに参加して、やりたいことをやるのが普通になりました。雑誌の作り方なんて知らないし、自分からは遠いものだと思っていたけど、やってみたらできたので。やろうと思えばやれるんだと実感できたことは、経験としてめっちゃ大きかったです。

下沢　ひとりだったらできなかった企画や目指さなかったゴールが、チームの力によって形になる。取材対象者の協力を受けることで責任も生まれる。そこには人から任されたのとは違う責任感の強さがありますよね。

大室　挑戦できる場があるのって、すごいことだと思ってて。自分で決めたから最後までやり切るっていうのも、挑戦が歓迎されていたり、失敗しても許される環境があるからできることだから。そういう環境さえあれば、挑戦は自然と生まれてくるはずなんです。eachって、なんだかんだで見捨てないじゃないですか。返信がこなくても、チーム内で揉め事が起きても見捨てないし、最後は必ず形にする。そうやってバックアッパーが真剣に向き合うことは、参加する学生たちが挑戦してみようと思える土台になっているんだろうなと思います。

北村　ワークショップもフィードバックも毎回すごく進化していますよね。「私のときにもやりたかった」って思いますもん。だから、毎回「eachは今年で最後」って話が出ますけど、マジでやめないでくれと思っています。どこまで進化していくのか、これからも見ていたいので。

大室　雑誌じゃない在り方もあるかもって話をしてましたけど、私はもう一回、大人バージョンのeachを作りたいですね。今は高校生のみだけど、大学生や社会人にも参加してもらいたい。前に大学生にも参加してもらっていたときは難しかったんですよ。もう自我が固まってるし、はじめましての人たちとチームになって未経験のことをするのは恥ずかしさもあったりして。衝突や葛藤や表現が素直に出ないというハードルがあったなと。それから我々も経験を積んできたので、大学生や社会人にも参加してもらって意見をぶつけ合いながらeachを作れたら、もう思い残すことはないですね。

下沢　いいね！私も普通に書きたい、大人版で。

岡本　それはちょっと面白いかもね。実際、大人でもeachに関わりたいって人はちらほらいるんだよ。

田村　Gスクエアに置いてあるeachを、すごく真剣に見てくれる人もいますよね。「これって僕もできますか？」とか「Uターンで帰ってきて、デザインやってるんです」みたいな。

阿部　そういう人たちが関われるプラットフォームになっていくのも面白いね。

大室　新しいことを始めたいとか、変わりたいと思っている大人が集まる場になったら面白そう。大人のほうが自分を曝け出すのが難しいだろうから、eachの体験は新鮮に響きそうですし。

藤井　また新しい取り組みになるとしたら、我々もサボれないですね。

岡本　確かに（笑）。とりあえず、今後のことは5号目が完成してから考えよう！

Editor's Note

「ローカルマガジンを作ろう」プロジェクト
講師・スタッフによる編集後記

『IN&OUT -ハコダテとヒト-』編集長　阿部光平

eachの創刊から5年。これまでに参加してくれた学生は100人近くになりました。今号ではかつての制作メンバーがサポーターを務め、表紙画を描き、ステートメントの作成もしてくれました。創刊時に「こうなったらいいな」と思っていたことが形になっていて、子どもが巣立っていくのを見守る親のような気持ちです。

みそしる　藤井 拓

eachで経験したコミュニケーション。自分の意見を持つ、伝える。人の意見を聞く。それをうまくまとめてアウトプット。デザイン・ライティングよりも、学校の勉強よりも、社会で生きる上で大事なことです。この冊子をつくりあげたみんなはきっと身長3cmくらい成長したはずなので、家に帰って測ってみてください!

Gスクエア　岡本啓吾・田村優奈

「失敗」ってイヤな字ですよね。「失って」「敗ける」ですよ。絶対嫌ですよね笑。今回eachに参加したみんなもたくさん失敗したんじゃないでしょうか。でも失敗することで、じゃあ次はこうしてみようとか、未来に活かすことができます。挑戦しない人は失敗はしませんが成長もない！ 勇気を出してeachに挑戦したみんなは

一般社団法人いとのこ　下沢杏奈・大室果瑚

人と何かをするって、本当にめんどくさいなって思うんです。でも人間って「一人じゃ何にもできない」ようにできてて。じゃあ、せっかく誰かと何かしなきゃ行けないなら、妥協するよりもぶつけてやる。そういうクリエイティブが生まれた5号目は素晴らしいから、まだまだ喧嘩から始まるクリエイティブを諦めきれないです。

大学生サポーター　北村梨紗

大学生活4年間、毎年関わらせていただきありがとうございました!何度やっても唯一無二でした。4年間の1年ずつの現在地を、たしかにeachに記録してもらっています。eachのおかげで拓けた人生があります。each、本当にありがとう!!来年以降も期待!!

大学生サポーター　西 映美

人生で初めて「自分らしく」ってなんだろう、「まがる」ってどういうことなんだろうと真剣に考えました。自分で自分の“いいところ”や“悪いところ”を見つけて、それを人に伝えるってすごく勇気がいります。「自分らしさ」がぶつかって、集まって、詰め込んだeachは傑作であると言えます!

サポーター　はまのまい

私は今回each初参加でした!「自分らしさって何だろう?」ステートメントにもあるこの言葉、個性豊かな高校生の子たちと関わる中で、自分自身を省みました。自分らしく生きている大人の背中こそが一番の見本なんじゃないかと思います。受け入れてくれたeachの皆にも大変感謝です!!

大学生サポーター　山口紗和

「まがる」というテーマに向き合う中で、ただまっすぐ進むことだけが正解じゃないと気づきました。立ち止まったり、遠回りしたり、迷いながら進むこともまた大切な道の一部なのだと。ここには、みんなが“まがり道”で見つけた言葉や想いがぎゅっと詰まっています。

Special Thanks

eachロゴデザイン
藤倉朱里

プチ編集長
ステートメント　**濱田心暖**

今回文章を書くにあたり、今まで以上に自分らしさとは何かを考えました。やはり一言では表しきれませんが、考え続けることが何よりも重要なのではないでしょうか。たくさん考えた分、厚みのある人生を送れるような気がします。

表紙グラフィック　**穴澤維穏**

表紙は、人魚と天使がお互いの生き方に憧れていて…勇気を出したら意外と不可能じゃなかった!という内容です。みなさんがワクワクした気持ちで自分の好きなことを思い切りやっちゃえますように!という願いを込めて描きました。

each【イーチ】
No.05　2025.9.28発行
発行/
函館コミュニティプラザGスクエア
〒040-0011 北海道函館市本町24番1号シエスタハコダテ4階
eachに関するお問い合わせは「info@g-sq.jp」まで
無断転載禁止

▲each Instagram　▲GスクエアInstagram　▲GスクエアX